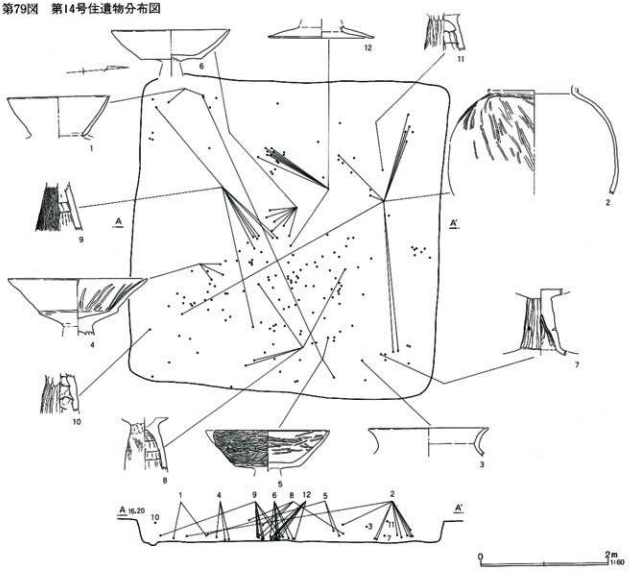
第79図　第14号住遺物分布図



南東のコーナーには貯蔵穴と思われるＰ6が存在し、長径0.55m×短径0.5m×深さ0.75mであった。

壁溝は東壁の中央部を除いてほぼ全周するが、途切れ途切れにピット状を呈する箇所もある。

出土遺物は土師器であり、大半は覆土中より出土している。南西のコーナーに壺１の口縁部が、Ｐ4の西側に高坏４、Ｐ6の西側に壺２が出土した。

１は直口壺で、僅かに内彎するが、ほぼ直線的に開く口縁である。内外面とも丁寧なナデの後、赤彩される。

２は比較的大形の壺で、体部外面はナデの後、篦磨きが施される。頸部外面の剝落痕から、頸部屈曲部に突帯を持つ壺であることがわかる。

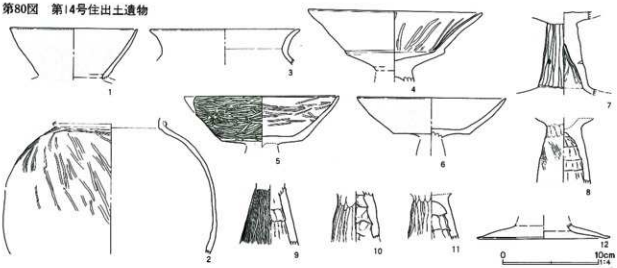
３は口縁が外反する甕で、口縁部内外面は丁寧にナデられている。

４～12は、高坏である。

４は坏部で、下部に段を持って外反気味に開く。坏部外面は丁寧なヨコナデ。内面には、ヨコナデの後、縦方向の篦磨きが間隔を置いて粗く施される。

５は坏部で、下部に稜を持って内彎気味に開く。坏部外面は、刷毛目調整の後、横方向の丁寧な篦磨き。内面にも横方向の篦磨きが施され、内外面とも赤彩される。柱状部との接合部には、「ほぞ」に相当する部分が見られる。

第80図　第14号住出土遺物



第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	壺	(13.6)			AFI	C	橙	10	内外面赤彩
2	壺				BF	B	にぶい褐	30	外面下部炭化物
3	甕	(16.0)			ABJ	B	橙	10	
4	高坏	18.5			BJ	C	明赤褐	75	
5	高坏	(16.4)			BDI	B	赤	30	内外面赤彩、口縁付近炭化物
6	高坏	(15.8)			AFI	C	明赤褐	10	外面赤彩
7	高坏				DFI	B	明赤褐	25	外面赤彩　脚部穴
8	高坏				BDF	B	にぶい赤褐	65	外面赤彩
9	高坏				DF	B	褐灰	20	
10	高坏				DF	B	橙	15	
11	高坏				DF	C	明赤褐	12	
12	高坏			(14.1)	AFI	C	橙	18	内外面赤彩

6は坏部で、下部に稜を持って内彎気味に開く。器面の風化が著しく、器面調整等の詳細は不明である。

7は坏部下端～柱状部である。柱状部は直線的で、膨らみを持たない。裾部は、明瞭な屈曲をもって開く。柱状部外面には筮ナデが施される。外面及び坏部内面は赤彩される。なお、柱状部外面には、細い棒で抉ったような小穴が1カ所見られる。

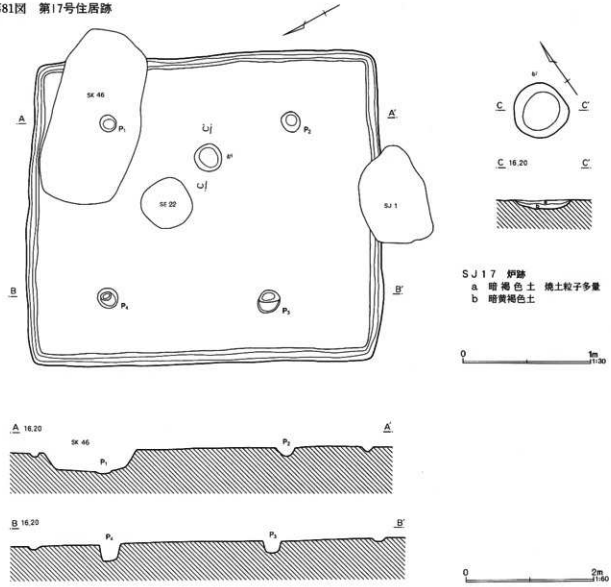
8は少し膨らみを持つ柱状部で、内面には4段の粘土帯接合痕が見られる。柱状部外面は、刷毛目調整から筮ナデ。上端の坏部との接合部には「ほぞ穴」に相当する部分が見られる。外面は赤彩される。

9は膨らみを持たない柱状部で、内面には2段の粘土帯接合痕が見られる。柱状部外面は筮磨き。

10・11は少し膨らみを持つ柱状部で、10の内面には4段、11の内面には2段の粘土帯接合痕が見られる。柱状部外面は筮ナデ。

12は裾部で、柱状部から明瞭な屈曲をもって直線的に広がる。

第81図　第17号住居跡



第17号住居跡（第81図）

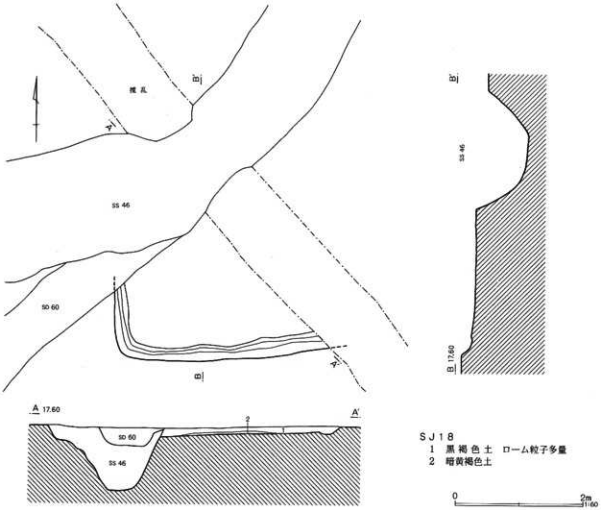
R－20～21グリッドに位置する。南側にやや離れて第41号住居跡が存在する。床面のみが検出された状態であり、壁溝の存在から住居跡が確認された。住居跡のプランは南北方向に細長い長方形で、長径5.7m×短径4.9mである。短軸方向に炉を持ち、主軸はN-62°-Wであった。

炉は中央部やや東側に位置し、P1とP2の内側に存在する。住居跡はP1、P2、P3、P4の4本主柱穴の構造を持つ。炉は東西に細長い不整円形で、長径0.46m×短径0.44m×深さ0.1mである。柱穴はP1=長径0.3m×短径0.25m×深さ0.1m、P2=長径0.35m×短径0.3m×深さ0.15m、P3=長径0.4m×短径0.38m×深さ0.2m、P4=長径0.35m×短径0.34m×深さ0.3mである。

壁溝は全周する。北東コーナーにあるP1の付近は第46号土壙で攪乱されているが、P1はその下から検出された。また、炉の北側には第22号井戸が重複し、南壁の中央部には攪乱が及んでいる。

遺物は検出されなかったが、住居跡形態、柱穴の覆土の色、炉の存在等から、古墳時代前期の住居跡と認定した。

第82図　第18号住居跡



第18号住居跡（第82図）

P～Q－16グリッドに位置する。調査区内において最西端の住居跡であり、南東側にやや離れて第19号住居跡が存在する。

南西のコーナー部分のみが現存しており、他の部分は第46号墳の周溝、第60号溝、撹乱によって削平されていた。

住居跡のプランは南北方向に細長い長方形で、長軸方向に主軸をとる構造と思われるが、柱穴も確認されない状態では不明である。出土遺物もなく、時期判定は不明と言わざるを得ないが、住居跡の覆土の色等の特徴から、古墳時代前期の住居跡と認定した。

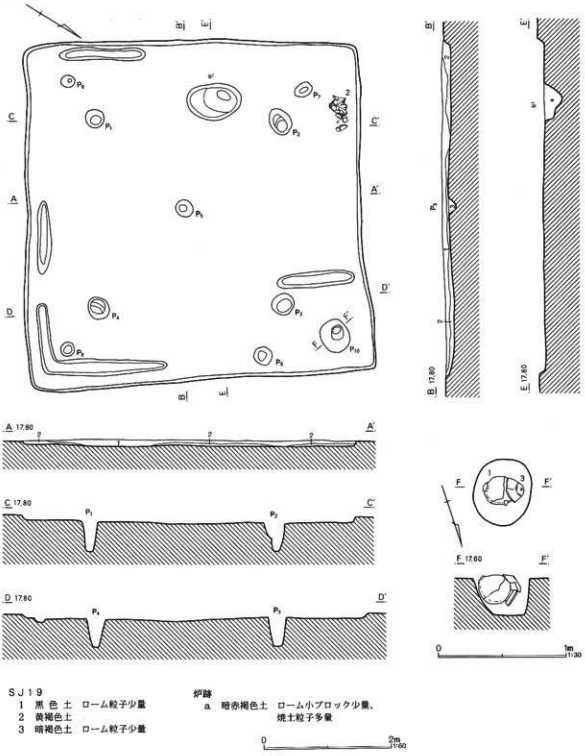
第19号住居跡（第83・84図）

N～O－17～18グリッドに位置する。北東側にやや離れて第41号住居跡が存在する。住居跡のプランは東西方向にやや細長い長方形で、長径5.6m×短径5.5m×深さ0.12m、主軸方向はN-123°-Wであった。

住居跡の中央部の西壁に寄った位置に炉を持ち、P1とP2を結ぶ線より壁側に寄っている。P1、P2、P3、P4の4本を主柱とするものと思われ、その外側にも補助柱穴と思われるP6、P7、P8、P9が存在する。また、中央部にはP5が存在する。

炉は南北方向に細長い楕円形で、長径0.9m×短径0.6m×深さ0.3mである。柱穴はP1＝長径0.32m×短径0.3m×深さ0.5m、P2＝長径0.45m×短径0.35m×深さ0.5m、P3＝長径0.4m×短径0.38m×深さ

第83図　第19号住居跡

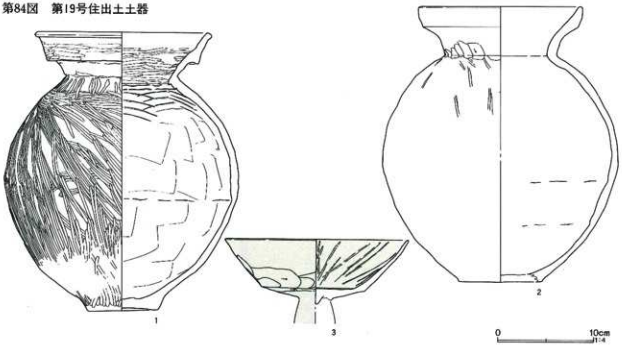


0.45m、P4＝長径0.4m×短径0.35m×深さ0.45m、P5＝長径0.3m×短径0.29m×深さ0.12mであった。

壁溝は部分的に存在し、P3の西側には間仕切状の溝が存在する。

北東コーナーには貯蔵穴と思われるP10が存在し、貯蔵穴の覆土上層には壺1が倒置した状態で出土しており、壺の口縁部は高坏3で蓋をされていたものと思われる。

第84図　第19号住出土土器



第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	壺	19.0	29.5	7.6	ADJ	B	にぶい橙	95	
2	壺	(17.3)	29.0	8.9	ABDI	C	褐	35	体部外面炭化物
3	高坏	19.5			ADJ	C	橙	45	内外面赤彩

北西コーナーP7の北側には、床面上に壺2が潰れた状態で出土した。

1は二重口縁壺である。口縁外面の段は鋭角で、下方に突出する。口唇は、強くナデられて端面をつくる。口縁部内外面及び体部外面には、丁寧なナデの後、やや粗い箆磨きが施される。2は複合口縁壺であるが、口縁端部が少し立ち上がるなど、二重口縁が意識されている。複合部下端はナデられて、鈍角の稜となっている。器面調整はヨコナデ・ナデが主である。3は高坏の坏部で、下部に稜を持つ。内面には、縦方向の箆磨きが粗く施される。内外面赤彩。柱状部との接合部には「ほぞ」に相当する部分が見られる。

第27号住居跡（第85～87図）

K－20～21グリッドに位置する。北側に第28号住居跡、南西側に第40号住居跡が隣接する。住居跡のプランは南北方向に細長い長方形で、長径5.8m×短径5.2m×深さ0.25m、主軸方向はN-42°-Wであった。

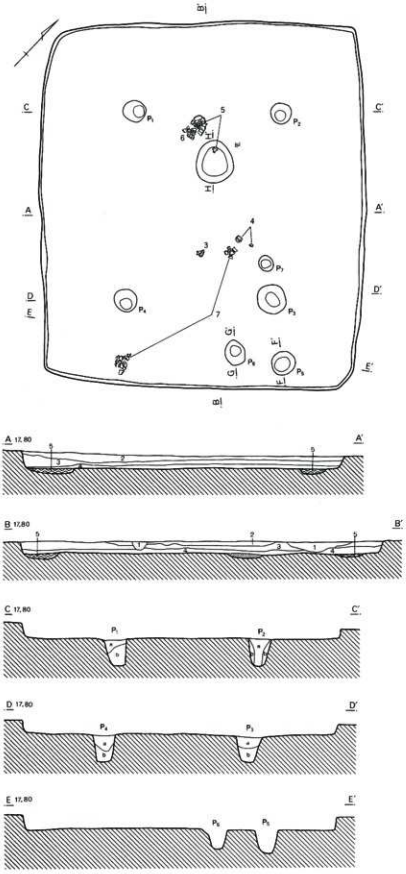
住居跡の中央部のやや北寄りに炉を持ち、P1とP2を結ぶ線より内側に存在する。P1、P2、P3、P4の4本を主柱とするものと思われる。

炉は南北方向にやや細長い楕円形で、長径0.68m×短径0.6m×深さ0.1mである。柱穴はP1＝長径0.37m×短径0.35m×深さ0.4m、P2＝長径0.35m×短径0.34m×深さ0.45m、P3＝長径0.5m×短径0.45m×深さ0.43m、P4＝長径0.36m×短径0.35m×深さ0.45m、P5＝長径0.38m×短径0.36m×深さ0.35m P6＝長径0.4m×短径0.32m×深さ0.3mであった。

壁溝は検出されなかった。

遺物は炉の中と、北側から高坏5、6が出土しており、南壁には高坏7が出土している。出土土器の割合からして、高坏の占める割合が高いことや、炉の周辺から出土する事例が多いこと等から、何等かの祭祀的様相も看取される。

第85図　第27号住居跡

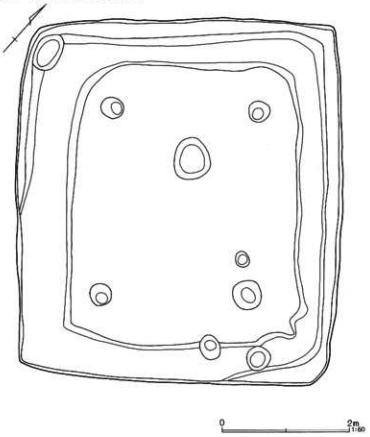


炉跡
a　暗 褐 色 土　ローム粒子・焼土粒子少量
b　暗黄褐色土　ローム小ブロック多量

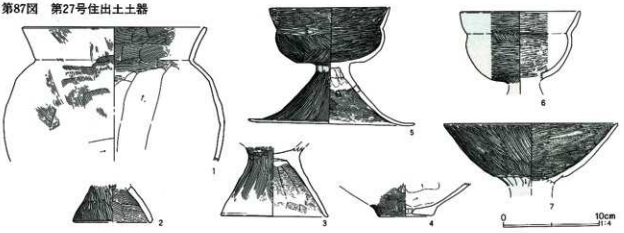
SJ27
1　暗 褐 色 土　ローム小ブロック
2　暗 褐 色 土　ローム粒子多量
3　褐　色　土　ローム粒子やや多量
4　褐　色　土　ローム粒子・焼土粒子少量
5　暗黄褐色土　黒褐色土ブロック

ピット
a　暗 褐 色 土　ローム粒子
b　暗 褐 色 土　ローム粒子少量
c　暗黄褐色土　ローム ブロック、ローム粒子多量

第86図　第27号住居跡掘り方



第87図　第27号住出土土器



第27号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	甕	(19.5)			ADF	B	にぶい黄橙	5	
2	小形器台			8.4	DFJ	B	にぶい黄橙	20	外面赤彩　透孔は4ケと推定される
3	台付甕			11.4	ADJ	B	にぶい黄橙	45	体部内面黒色化
4	甑			5.7	AD	B	にぶい黄橙	30	底部径1.1cm穿孔
5	高坏	12.8	12.4	17.6	BFJ	B	橙	70	内外面赤彩　口唇付近炭化物
6	高坏	12.7			AF	B	にぶい橙	55	内外面赤彩
7	高坏	18.5			FJ	B	にぶい黄橙	50	赤彩

1は甕で、体部外面上半及び口縁部内面に刷毛目を残し、体部外面下半及び内面は篦削りされる。2は小形器台或いは高坏の脚部と思われる。外面は篦磨きの後、赤彩される。3は、台付甕の台部である。4は甑と推定される。外面は刷毛目調整、内面は篦削りされる。底部中央には、焼成前に孔1カ所が穿たれている。5・6は、共に丸底鉢に脚部を付加した形態の高坏である。5は、裾が大きく広がる「八」字状の脚部を持つ。透孔は不規則な配置で5カ所。坏部の底には、稜が作られる。口縁は、ほぼ直線的に開く。口縁内外面に篦削りを加えた後、外面及び坏部内面には細かな篦磨きが丁寧に施される。脚部内面を含む全面が赤彩される。6は脚部を欠損する。口縁が内彎気味である点、坏部の底に稜を持たない点で5と異なる。5・6とも坏部内面の剥落が著しい。7は高坏で、外面下部に接合痕を残して、坏部はやや内彎気味に開く。坏部内外面には、丁寧に篦磨きが施される。部分的に赤彩の痕跡が残るが、範囲は不明である。

第28号住居跡（第88図）

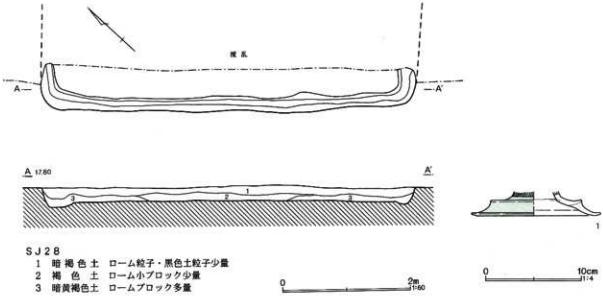
L－20グリッドに位置する。東側に第42号住居跡、南側に第27号住居跡が隣接して存在する。鞠壇状の造成で住居跡の大半が削平されており、南壁部分のみが現存する。

住居跡は南北方向に細長い長方形を呈するものと思われ、現存する南側の壁は長さ5.9m×深さ0.18mであった。

遺物は高坏の脚部が1点出土している。出土遺物、住居跡の規模や覆土の状態等から、古墳時代前期の住居跡と判断した。

1は、有段高坏の裾部である。器面調整は、内外面ともヨコナデである。柱状部が僅かに残存するが、明瞭な屈曲をもって立ち上がり、縦方向の篦磨きが施される。外面は、全体的に赤彩されている。

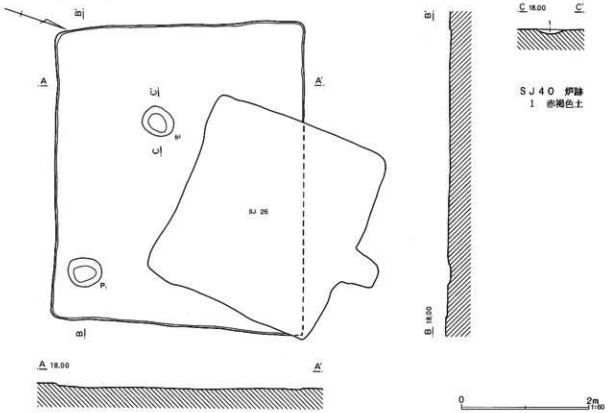
第88図　第28号住居跡と出土遺物



第28号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏			13.7	AJ	B	橙	5	外面赤彩

第89図　第40号住居跡



第40号住居跡（第89図）

K－19グリッドに位置する。東側に第27号住居跡が隣接して存在する。住居跡のプランは東西方向に細長い長方形で、長径4.95m×短径3.9m×深さ0.05m、主軸方向はN-107°-Wであった。

北西コーナーから中央部にかけて、平安時代の第26号住居跡と重複する。僅かな掘り込みが検出された住居跡で、長軸上中央部やや西寄りに炉が存在する。

柱穴は検出できなかったが、南東コーナーに貯蔵穴状の浅いピットP1が検出された。

炉は東西方向にやや細長い楕円形で、長径0.5m×短径0.45m×深さ0.1mであり、貯蔵穴P1は長径0.55m×短径0.45m×深さ0.1mであった。

壁溝は検出されなかった。

遺物は出土しておらず、住居跡の所属時期は不明であるが、住居跡の形態、炉の位置、覆土から古墳時代前期の住居跡と判断した。

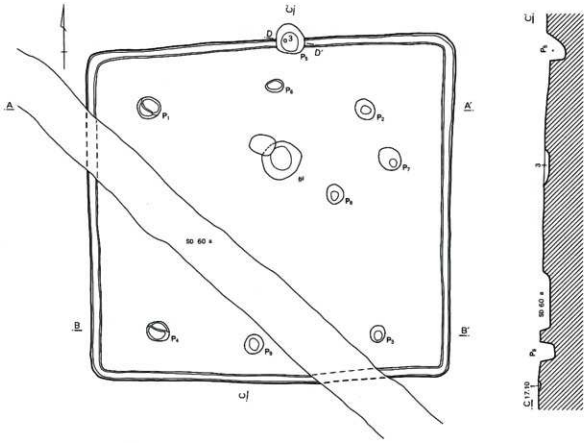
第41号住居跡（第90・91図）

O～P－19グリッドに位置する。南西側にやや離れて第19号住居跡が存在する。西壁から南壁にかけて第60号溝によって、攪乱を受けている。住居跡のプランは東西方向にやや細長い長方形で主軸を南北の短軸方向にとり、長径5.8m×短径5.5mで掘り込みは殆ど確認されなかった。住居跡の主軸方向はN-3°-Eであった。

住居跡の主軸上中央部やや北寄りに炉が存在する。P1、P2、P3、P4の4本を主柱とする構造と思われ、主軸方向の中間部にはP6、P9の補助柱穴が存在する。また、中央部にはP8が存在する。北壁中央部にP5が存在するが、住居跡の付属ピットではない可能性が高い。

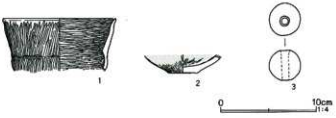
炉は南北方向に細長い不整円形で、長径0.65m×短径0.6m×深さ0.1mである。柱穴はP1＝長径0.38m×短径0.35m×深さ0.15m、P2＝長径0.35m×短径0.3m×深さ0.2m、P3＝長径0.3m×短径0.25m×

第90図　第41号住居跡と出土遺物



ＳＪ４１
1　暗 褐 色 土　ローム粒子
2　暗 褐 色 土　ロームブロック・黒褐色土
3　暗赤褐色土　焼土粒子　（炉跡）

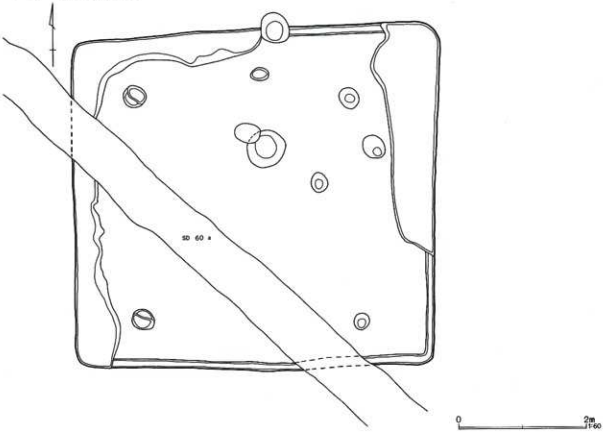
ピット
a　暗 褐 色 土
b　暗黄褐色土
c　黒 褐 色 土　ローム粒子
d　暗 褐 色 土　ローム粒子



第41号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	鉢	(12.0)			ＦＪ	Ａ	にぶい褐		内外面スス
2	鉢			(3.1)	ＡＤＦ	Ｂ	にぶい黄橙	25	内外面　底面赤彩
3	土玉				ＡＢＣ				外径3.3孔径1.0～0.7厚さ3.2cm

第91号　第41号住居跡掘り方



深さ0.3m、P4＝長径0.35m×短径0.34m×深さ0.25m、P5＝長径0.48m×短径0.45m×深さ0.3mであった。P9＝長径0.35m×短径0.3m×深さ0.25mであった。

壁溝は全周し、約20～10cmの深さであった。貯蔵穴等の付属施設はなく、床面だけが検出された住居跡である。

遺物は少なく、土師器が2点と土玉が1点である。

1は、小形丸底鉢の系譜上にある鉢である。口縁部は極めて幅広で開きは少ない。口縁部外面下端には接合痕を残す。外面は、刷毛目調整の後、縦方向に、内面は横方向に、共に細かな篦磨きが丁寧に施される。

2は鉢の底部と推定される。内外面には篦磨きが施され、底面を含む全面が赤彩される。

3は土玉で、重さ33.6gと比較的大形である。

第42号住居跡（第92図）

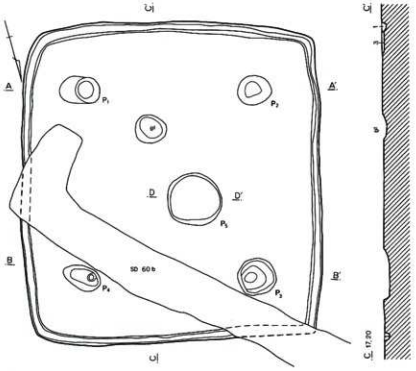
L～M－21～22グリッドに位置する。東側に第48号住居跡が、北東側に第50号住居跡が隣接して存在する。東壁中央部から北西コーナーにかけて、第60号溝によって攪乱を受けている。

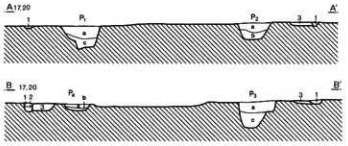
住居跡のプランは南北方向にやや細長い長方形で主軸を南北の長軸方向にとり、長径5.1m×短径4.83mで、掘り込みは殆ど確認されなかった。住居跡の主軸方向はN-165°-Wであった。

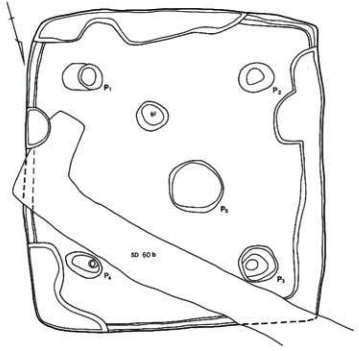
住居跡の主軸上中央部やや南寄りに炉が存在し、P1とP2を結んだ線より内側に位置する。P1、P2、P3、P4の4本を主柱とする構造と思われる。炉の北側には大きな土壙状のピットが存在するが、住居跡の付属施設ではないものと思われる。

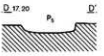
炉は主軸上より若干東側にずれるが、東西方向に細長い不整円形で、長径0.51m×短径0.45m×深さ0.1mである。柱穴はP1＝長径0.65m×短径0.45m×深

第92図　第42号住居跡と掘り方



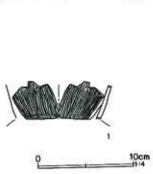






SJ42
1　暗褐色土　ローム粒子
2　暗黄褐色土
3　暗褐色土　ロームブロック多量

ピット
a　暗褐色土　ローム粒子少量
b　暗黄褐色土　ローム小ブロック
c　暗褐色土　ローム小ブロック少量



第42号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	壺				ADF	B	にぶい赤褐	2	内外面赤彩

さ0.4m、P2=長径0.55m×短径0.48m×深さ0.3m、P3=長径0.62m×短径0.61m×深さ0.45m、P4=長径0.65m×短径0.45m×深さ0.15m、P5=長径0.91m×短径0.82m×深さ0.16mであった。

壁溝は全周し、約10cm前後の深さであった。貯蔵穴等の付属施設はなく、床面だけが検出された住居跡である。

遺物は少なく、土師器の小型壺が1点のみ出土している。

1は小破片であるが、直口壺の口縁部と推定される。外面の頸部屈曲付近のみ2～3段の横方向の篦磨きが施され、それ以上の部分及び内面には縦方向の篦磨きが施される。いずれも細かく、丁寧である。内外面が赤彩されている。

第44号住居跡（第93～95図）

M－24～25グリッドに位置する。東側に第13号住居跡が隣接し、北側にやや離れて第14号住居跡が存在する。北西コーナーから北東コーナーにかけて、第81号溝によって、攪乱を受けており、北壁が辛うじて現存している。

住居跡のプランは南北方向に若干細長い長方形で主軸を南北方向にとり、長径5.0m×短径4.9mで×深さ0.15mである。住居跡の主軸方向はN－45°－Wであった。

炉は住居跡の長軸方向上で、中央部からやや北西のP5の方向に寄った位置に存在する。主柱穴は決め難く、P4、P5、P6、P7の4本を主柱とするものと思われるが不揃いである。P7の北西側にP1が存在するが、これが柱穴となるか、貯蔵穴となるかは不明である。第81号溝に攪乱された部分に、P4の代わりになる柱穴が存在していた可能性もなる。

炉は南北方向に細長い楕円形で、長径0.61m×短径0.52m×深さ0.19mである。柱穴はP1=長径0.75m×短径0.6m×深さ0.19m、P2=長径0.28m×短径0.25m×深さ0.2m、P3=長径0.35m×短径0.3m×深さ0.21m、P4=長径0.35m×短径0.3m×深さ0.25m、P5=長径0.55m×短径0.45m×深さ0.28m、P6=長径0.58m×短径0.55m×深さ0.2m、P7=長径0.7m×短径0.65m×深さ0.35mであった。

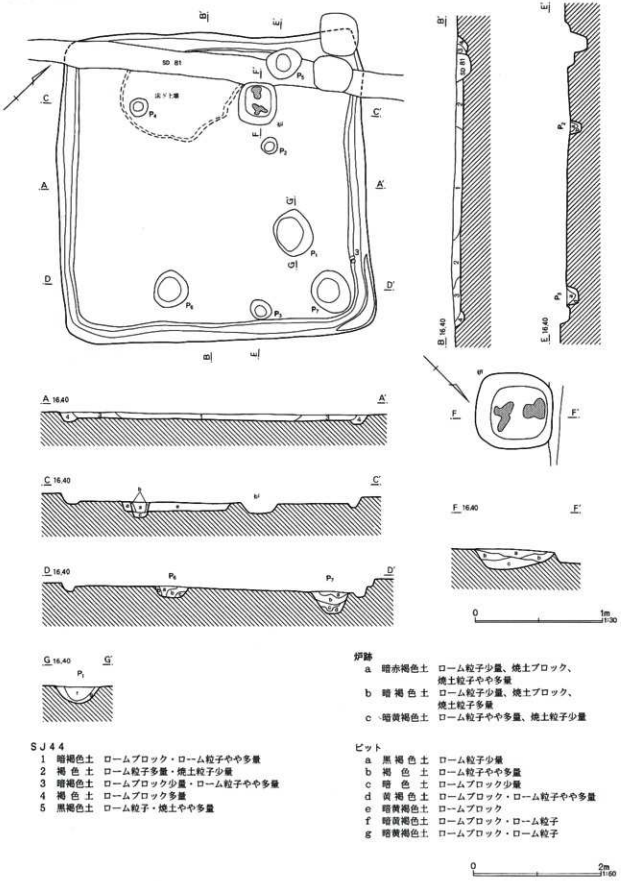
壁溝は全周し、約10cm前後の深さであった。貯蔵穴等の付属施設はない。P4の下部に土壙上の掘り込みが存在したが、住居跡の付属施設ではない。

遺物は、覆土がやや厚いため比較的多くの土器が出土している。

土器の主なものは、壺と高坏であり、他に土玉が1点出土している。土器は床面より浮いた覆土中から出土しているもので、高坏の脚部が目立つ。壺1の口縁部は炉の周辺と西壁の中央部付近から出土しており、8、10～12の高坏脚部も炉の周辺から出土した。小型壺3は南東コーナー付近から、高坏の坏部6、7は南壁側の中央部付近から、土玉13は北東コーナー付近から出土した。祭祀用土器である高坏が多く出土することから、祭祀的な様相も考えられる。

1・2は複合口縁壺である。口縁部は明瞭な屈曲をもって、外反気味に開く。複合部下端には接合痕を残す。口唇は強くナデて端面をつくる。1の外面及び口縁部内面には目の粗い刷毛目調整が施される。外面の肩部以下は篦削りされる。2は内外面ともナデられている。3は小形の直口壺で、いわゆる小形坩である。小さな平底を持つ。外面には篦削りが多用される。4は口縁部が屈曲して開く鉢である。成形は粗雑で、外面には篦削りが多用される。5は壺の底部と推定する。6～12は高坏である。6は坏部で、下部に稜をもって、ほぼ直線的に開く。胎土の肌理が粗く、器壁は全体的に厚い。内外面に篦削りが多用される。7も坏部で、下部に微かな稜をもって、内彎気味に開く。8は膨らみを持つ柱状部で、裾部は屈曲をもって開く。柱

第93図　第44号住居跡

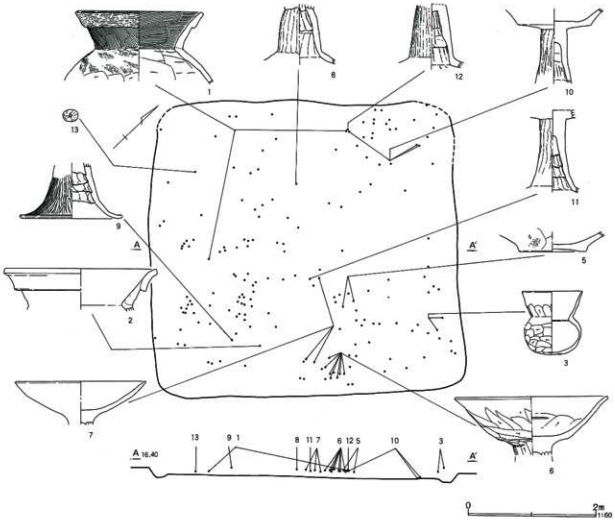


炉跡
a　暗赤褐色土　ローム粒子少量、焼土ブロック、焼土粒子やや多量
b　暗 褐 色 土　ローム粒子少量、焼土ブロック、焼土粒子多量
c　暗黄褐色土　ローム粒子やや多量、焼土粒子少量

ＳＪ４４
1　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子やや多量
2　褐 色 土　ローム粒子多量・焼土粒子少量
3　暗褐色土　ロームブロック少量・ローム粒子やや多量
4　褐 色 土　ロームブロック多量
5　黒褐色土　ローム粒子・焼土やや多量

ピット
a　黒 褐 色 土　ローム粒子少量
b　褐　色　土　ローム粒子やや多量
c　暗　色　土　ロームブロック少量
d　黄 褐 色 土　ロームブロック・ローム粒子やや多量
e　暗黄褐色土　ロームブロック
f　暗黄褐色土　ロームブロック・ローム粒子
g　暗黄褐色土　ロームブロック・ローム粒子

第94図　第44号住遺物分布図



状部外面は箆ナデ、内面下半は箆削りされる。外面赤彩。9は裾まで喇叭状に開く脚部で、外面は箆磨きが施され、赤彩される。内面には4段の接合痕が残る。10は、下部に稜をもって開く坏部を持ち、柱状部は膨らまない。柱状部外面は箆磨きが施される。外面に赤彩の痕跡が残る。11も膨らみを持たない柱状部で、裾部は屈曲をもって開く。内面には3段の接合痕が残る。外面の調整は箆ナデである。12は、やや膨らみを持つ柱状部で、裾部は屈曲をもって開く。内面には1段の接合痕が残る。外面の調整は箆ナデである。13は土玉で、赤彩されるが、外面の剝落が著しい。

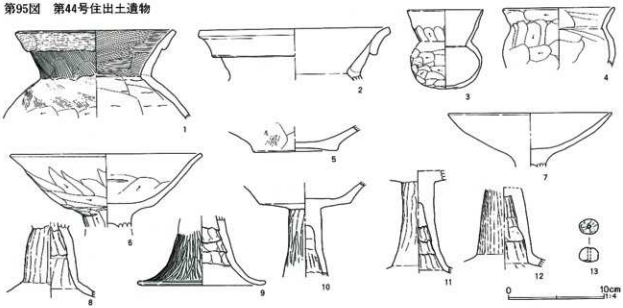
第45号住居跡（第96～98図）

J－24～25グリッドに位置する。西側に第47号住居跡が隣接して存在する。住居跡の北壁中央部から南壁中央部にかけて、炉の真上を通って第78号溝が重複する。溝が浅いため、攪乱は炉床面までには至っていなかった。また、南東コーナーは、第73号溝によって攪乱されていた。

住居跡のプランは南北方向にやや細長い長方形で、主軸を南北方向にとり、長径5.35m×短径5.15m×深さ0.12mである。住居跡の主軸方向はN-29°-Eであった。

炉は住居跡の長軸方向上の中央部やや北寄りに存在し、P1とP2を結ぶ線のやや内側に位置する。住居跡はP1、P2、P3、P4の4本を主柱とする構造と思わ

第95図　第44号住出土遺物



第44号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	壺	(17.0)			ADFI	B	橙	20	口縁外面炭化物
2	壺	20.0			ADF	D	橙	10	
3	壺	8.0	8.3	2.2	ADFI	C		75	
4	鉢	(11.7)			ABDF	B	橙	20	
5	壺			(9.0)	ADFJ	D		40	
6	高坏	20.4			BFJ	B	明赤褐	45	赤彩？
7	高坏	(17.4)			ADFJ	D	にぶい黄橙	30	
8	高坏				BF	B	橙	40	外面赤彩
9	高坏			13.5	DFIJ	B	橙	15	外面赤彩
10	高坏				ABDF	D	橙	35	外面赤彩
11	高坏				BDI	B	橙	40	
12	高坏				ABDJ	D	橙	45	
13	土玉				AE				外径2.0孔径0.3厚さ1.6cm　赤彩

れ、明らかに住居跡に付属しないピットが多く存在する。P6、P8は南壁際で対称的な位置に存在し、付属ピットの可能性がある。P5、P7は場合によっては攪乱の可能性もある。

炉は南北方向に細長い楕円形で、長径0.85m×短径0.79m×深さ0.2mである。柱穴はP1＝長径0.57m×短径0.52m×深さ0.65m、P2＝長径0.48m×短径0.46m×深さ0.4m、P3＝長径0.48m×短径0.45m×深さ0.52m、P4＝長径0.5m×短径0.45m×深さ0.52m、P5＝長径0.5m×短径0.45m×深さ0.15m、P6＝長径0.45m×短径0.43m×深さ0.45m、P7＝長径0.42m×短径0.4m×深さ0.34m、P8＝長径0.6m×短径0.52m×深さ0.16mであった。

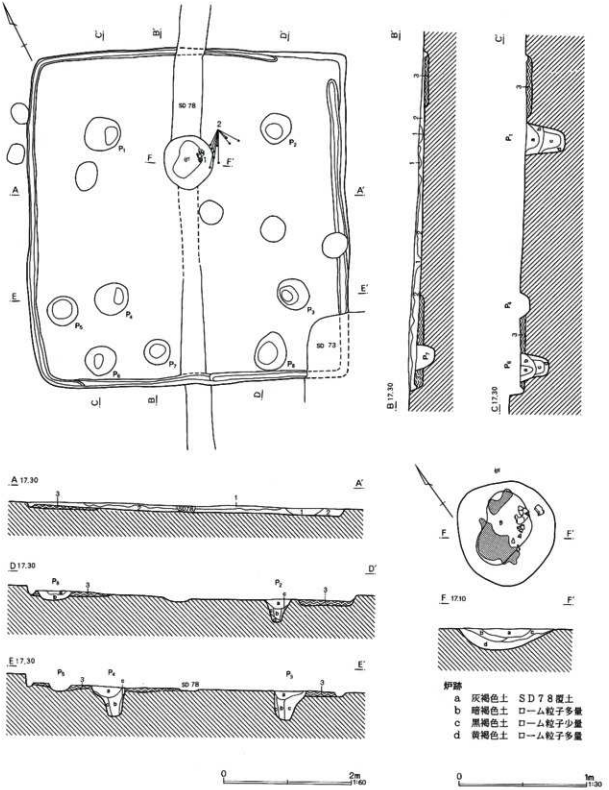
壁溝は北東コーナーが一部途切れるものほぼ全周し、約10cm前後の深さであった。貯蔵穴等の付属施設はない。

出土遺物は、壺が2点出土している。

1は直口壺である。小さく、やや上げ底気味の底部を持つ。口縁部内外面には縦方向、体部外面には横方向の箆磨きが丁寧に施される。外面及び口縁部内面は赤彩される。

2は大形壺の体部である。内外面に刷毛目調整がなされた後、外面には縦方向の粗い箆磨きが施される。体部内面上部は、箆ナデで刷毛目がナデ消される。

第96図　第45号住居跡

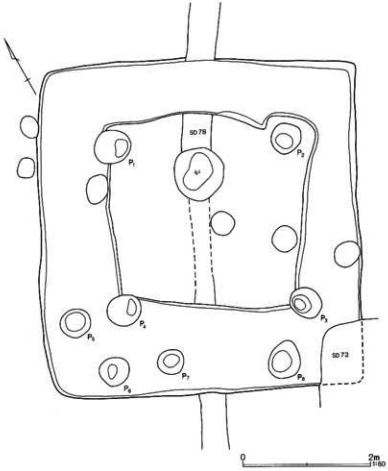


炉跡
a　灰褐色土　ＳＤ７８覆土
b　暗褐色土　ローム粒子多量
c　黒褐色土　ローム粒子少量
d　黄褐色土　ローム粒子多量

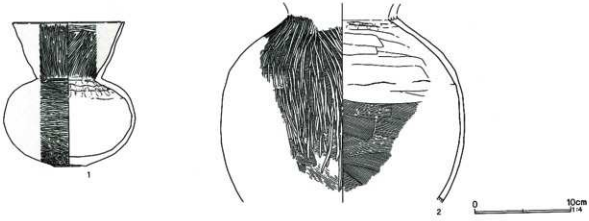
ＳＪ４５
1　灰褐色土　ローム粒子少量
2　褐 色 土　ロームブロック・ローム粒子多量
3　暗褐色土　ロームブロックやや多量（貼床）

ピット
a　灰褐色土　ローム粒子やや多量
b　黒褐色土　ローム小ブロック・ローム粒子少量
c　黒褐色土　ローム小ブロック・ローム粒子多量
d　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量

第97図　第45号住居跡掘り方



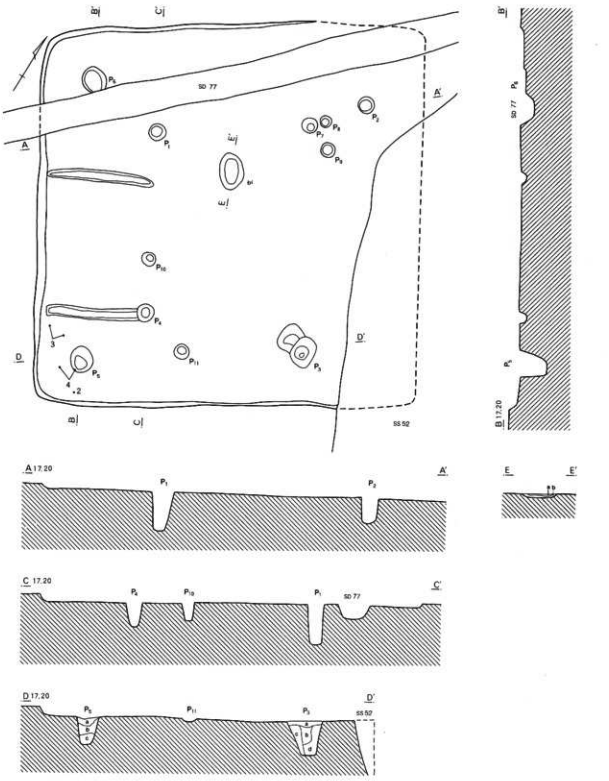
第98図　第45号住出土土器



第45号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	壺	11.8	15.1	3.3	BF	B	橙	55	赤彩
2	壺				AD	A	にぶい黄橙	15	

第99図　第46号住居跡



SJ46

ピット

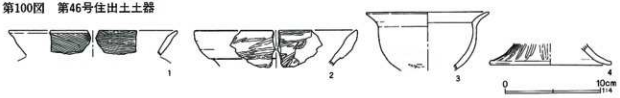
a　黒褐色土　ローム粒子少量
b　黒褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量
c　暗黄褐色土　ロームブロック少量
d　暗黄褐色土　ロームブロック多量

炉跡

a　黒褐色土　焼土粒子多量、炭化物少量
b　赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒子

0　2m
1:80

第100図　第46号住出土土器



第46号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	甕	(18.0)			ADJ	B	橙		外面炭化物
2	甑	(17.2)			DFJ	B	にぶい橙	2	
3	鉢	(13.0)			FJ	C	橙	23	内外面赤彩
4	高坏			(12.8)	AF	B	にぶい黄橙	15	

第46号住居跡（第99～100図）

K～L－23～24グリッドに位置する。西側に第48号住居跡が、南東側に第47号住居跡が隣接して存在する。西壁から北東コーナーにかけて第77号溝が重複し、東壁から南東コーナーにかけて第52号墳の周溝と重複する。

住居跡のプランは南北方向にやや細長い長方形で、主軸を南北方向にとり、長径6.05m×短径6.0m×深さ0.1mである。住居跡の主軸方向はN-31°-Eであった。

炉は、住居跡の長軸方向上の中央部やや北寄りに存在する。P1、P2、P3、P4の4本を主柱とする構造と思われるが、不揃いであり、明確にし得ない。或いは攪乱部分に主柱穴が存在していた可能性もある。また、P5、P6が主柱穴となり、それに対応する柱穴が攪乱内に存在していたことも考えられる。しかし、これ程間隔の開く柱穴は、本遺跡のこの時期の住居跡にはあまり例がないが、第47号住居跡に類似する。

炉は南北方向に細長い楕円形で、長径0.62m×短径0.39m×深さ0.05mである。柱穴はP1＝長径0.27m×短径0.27m×深さ0.65m、P2＝長径0.31m×短径0.26m×深さ0.45m、P3＝長径0.31m×短径0.26m×深さ0.55m、P4＝長径0.27m×短径0.25m×深さ0.41m、P5＝長径0.42m×短径0.36m×深さ0.41m、P6＝長径0.42m×短径0.41m×深さ0.55m、P10＝長径0.27m×短径0.25m×深さ0.31m、P11＝長径0.25m×短径0.23m×深さ0.05mであった。

壁溝は確認されなかったが、P4から西壁までと、P1とP10の中間から西壁へと、間仕切状の溝が検出された。貯蔵穴等の付属施設はない。

出土遺物は、覆土が若干残っていたP5の周辺からまとまって、土器が4個体分出土した。

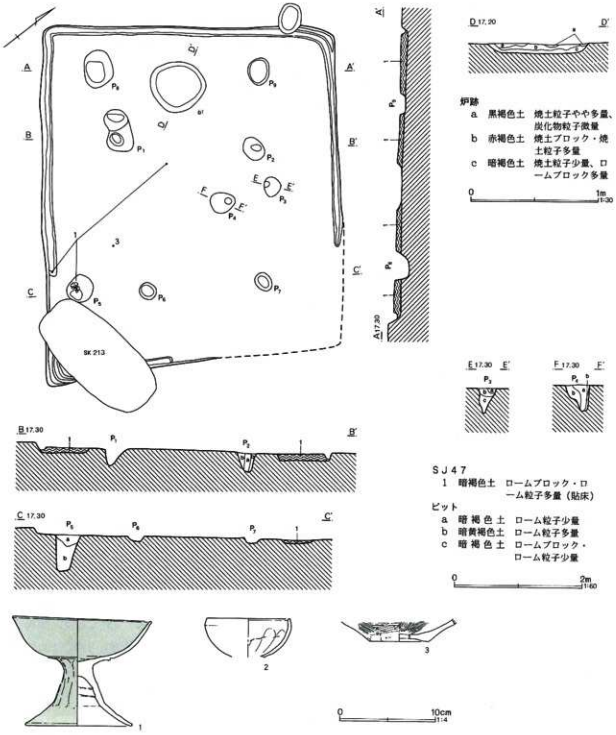
1は甕の口縁部で、内外面に刷毛目調整が施される。口縁部の器壁は、やや肥厚されている。

2は甑と思われる。壺の可能性もある。やや幅広の複合口縁部は、下端に接合痕を残す。内外面に粗い篦磨きが施される。

3は口縁部が屈曲して外反する鉢である。風化のため、器面調整は不明だが、内外面とも赤彩されている。

4は、第44号住9と同様に、裾まで喇叭状に開く高坏脚部と思われる。外面には粗く篦磨きが施される。

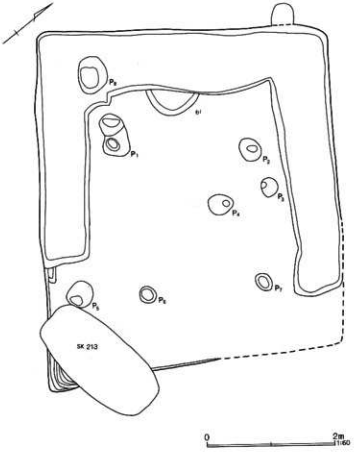
第101図　第47号住居跡と出土土器



第47号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	高坏	14.7	11.5	(11.3)	ADI	B	にぶい黄橙	75	内外面赤彩
2	鉢	(8.8)			J	C	橙	35	
3	甕			(6.2)	AI	B	にぶい赤褐	8	内面厚く炭化物

第102図　第47号住居跡掘り方



第47号住居跡（第101～102図）

Ｊ～Ｋ－24グリッドに位置する。東側に第45号住居跡が、北東側に第46号住居跡が隣接して存在する。住居跡の南東コーナー付近は削平されており、南西コーナーでは第213号土壙と重複する。

住居跡のプランは南北方向にやや細長い長方形で、主軸を南北方向にとり、長径5.4m×短径4.8m×深さ0.15mである。住居跡の主軸方向はN-50°-Wであった。

炉は住居跡の長軸方向上の中央部の北壁に寄った部分に存在し、Ｐ8とＰ9を結ぶ線のやや内側に位置する。住居跡はＰ5、Ｐ7、Ｐ8、Ｐ9の４本を主柱とする構造と思われる。

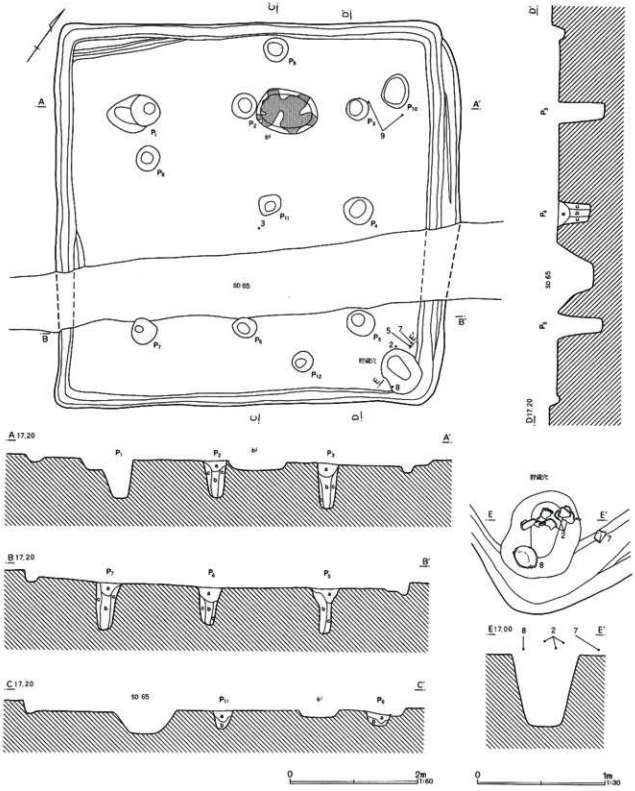
炉は東西方向に細長い楕円形で、長径0.65m×短径0.43m×深さ0.3mである。柱穴はＰ1＝長径0.65m×短径0.43m×深さ0.3m、Ｐ2＝長径0.36m×短径0.34m×深さ0.35m、Ｐ3＝長径0.32m×短径0.26m×深さ0.4m、Ｐ4＝長径0.37m×短径0.35m×深さ0.4m、Ｐ5＝長径0.43m×短径0.41m×深さ0.6m、Ｐ6＝長径0.28m×短径0.26m×深さ0.1m、Ｐ7＝長径0.3m×短径0.25m×深さ0.13m、Ｐ8＝長径0.62m×短径0.46m×深さ0.23m、Ｐ9＝長径0.45m×短径0.35m×深さ0.1mであった。

壁溝はほぼ全周していたものと思われ、貯蔵穴等の付属施設はない。

出土遺物は、鉢と甕の底部が出土した。Ｐ5内からは、高坏１が出土した。

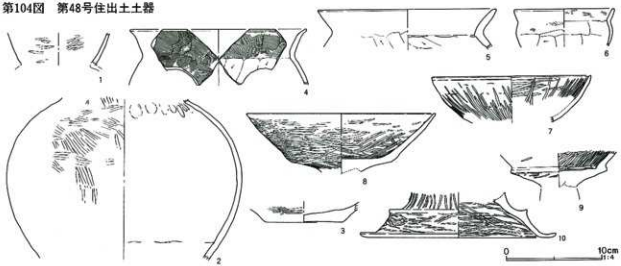
１は下部に段を持つ椀状の坏部を持つ高坏である。裾部は微かな屈曲をもって開く。坏部外面の口縁から幅約2.5cmに帯状の赤彩が施される。２は鉢。３は甕か？底面は薄く、内面には炭化物が厚く付着する。

第103図　第48号住居跡



SJ48
ピット
a　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子少量
b　暗褐色土　ローム粒子やや多量・炭化物粒子少量
c　暗黄褐色土　ロームブロック少量・ローム粒子やや多量

第104図　第48号住出土土器



第48号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	壺				AFI	D	明赤褐		内外面赤彩
2	壺				BDFJ	C	橙	20	
3	壺			(8.0)	ADI	D	にぶい橙	5	
4	甕	(17.7)			DF	A	にぶい橙	10	口縁部外面炭化物
5	壺?	(19.0)			ACDI	B	にぶい橙	10	
6	鉢	(10.5)			ABFB	B	橙	10	内外面赤彩
7	高坏	(16.9)			ABFI	A	にぶい赤褐	15	内外面赤彩
8	高坏	(20.0)			ADFI	B	橙	35	内外面赤彩
9	高坏				ABGJ	A	赤	30	内外面赤彩
10	高坏			(20.8)	ABCJ	B	にぶい赤褐	15	内外面赤彩

第48号住居跡（第103～104図）

L－22～23グリッドに位置する。西側に第42号住居跡が、北側に第50号住居跡が、南東側に第46号住居跡が隣接して存在する。西壁から東壁にかけてやや南壁寄りに第65号溝が重複する。

住居跡のプランは東西方向にやや細長い長方形で、主軸を南北方向にとり、長径6.45m×短径6.0mである。床面のみ検出された住居跡であり、主軸方向はN-35°-Wであった。

炉は主軸線上の北壁に寄った部分に存在し、P1とP3を結ぶ線上にあり、ややP3側に寄る。P1、P3、P5、P7の4本を主柱とする構造と思われる。

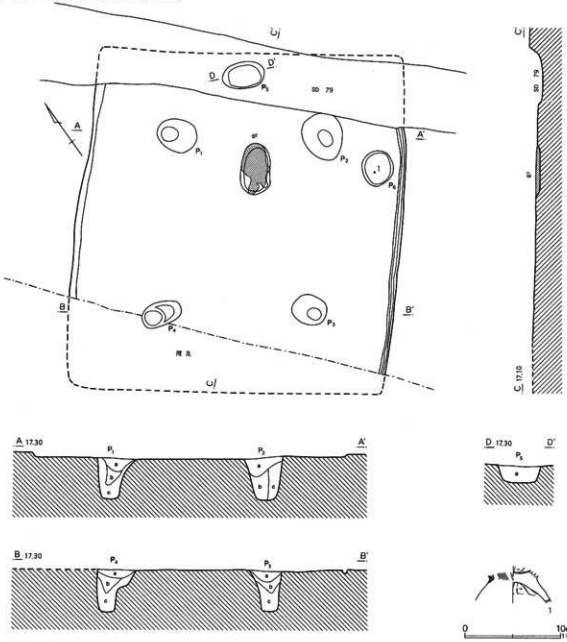
炉は東西方向に細長い楕円形で、長径0.89m×短径0.67m×深さ0.59mである。柱穴はP1＝長径0.83m×短径0.6m×深さ0.63m、P2＝長径0.41m×短径0.4m×深さ0.6m、P3＝長径0.36m×短径0.34m×深さ0.7m、P4＝長径0.45m×短径0.43m×深さ0.53m、P5＝長径0.45m×短径0.4m×深さ0.75m、P6＝長径0.4m×短径0.32m×深さ0.6m、P7＝長径0.42m×短径0.45m×深さ0.76m、P8＝長径0.4m×短径0.38m×深さ0.4m、P9＝長径0.42m×短径0.4m×深さ0.26m、P10＝長径0.55m×短径0.45m×深さ0.25m、P11＝長径0.35m×短径0.3m×深さ0.32m、P12＝長径0.35m×短径0.34m×深さ0.4mであった。

壁溝はほぼ全周していたものと思われ、2重の部分があるため、建て直しの可能性がある。

貯蔵穴は南東コーナーにあり、長径0.68m×短径0.54m×深さ0.59mで、壺2と高坏8が出土した。

1は直口壺の口縁部で、ヨコナデの後に内外面に粗い篦磨きが施され、赤彩される。

第105図　第49号住居跡と出土土器



ＳＪ４９
ピット
a　暗褐色土　ローム粒子少量
b　暗黒褐色土　ロームブロック・ローム粒子少量
c　黄褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量

第49号住居跡出土遺物観察表

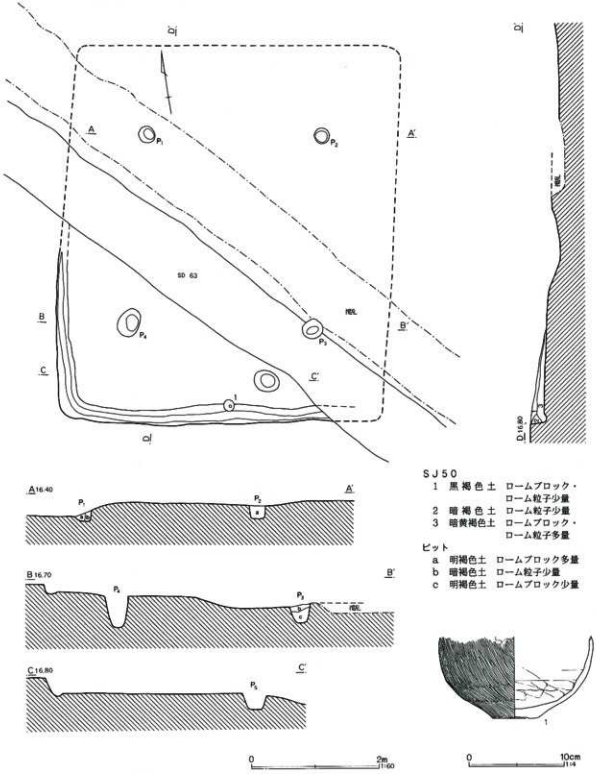
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	台付甕				AD	C	にぶい黄橙	5	

2は大形壷の体部で、外面には箆磨きの痕跡が微かに残る。

3は壷の底部である。

4は外反する口縁部を持つ甕である。外面及び口縁部内面には、目が細かく、鋭い刷毛目調整が施される。体部内面は箆削りされる。

第106図　第50号住居跡と出土土器



第50号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	壺			4.8	ADJ	B	橙	50	外面赤彩

5は、短い単純口縁を持つ壺か？器壁は厚く、内面調整は粗雑である。

6は、口縁が屈曲して開く鉢である。体部外面下半は篦削りされ、器壁は極めて薄い。内外面に赤彩される。

7～10は高坏である。7は内彎して立ち上がる坏部で、下部を欠損する。口唇には内傾する端面をつくる。内外面とも篦磨きが施され、赤彩される。

8は、下部に稜をもって直線的に開く坏部である。内外面とも篦磨きが施され、赤彩される。脚部との接合部には「ほぞ」に相当する部分が見られる。内面に炭化物が薄く付着している。

9は、下部に段をもって開く坏部である。外面にはナデの後、暗文状に粗く篦磨きが施される。内面には密に篦磨きが施され、内外面とも赤彩される。脚部との接合部には「ほぞ」に相当する部分が見られる。

10は、有段高坏である。内面の篦磨き、及び赤彩などから、坏部と考える。坏底部は、粘土帯の接合部分で剥落し、欠損している。口縁は、坏底部との境に段をもって外反した後、更に鋭い段をもって、もう一度大きく外反して開く。下段には、縦方向の篦磨きが間隔をおいて暗文状に施される。上段には横方向の篦磨きが粗く施される。内面にも篦磨きが粗く施される。内外面とも赤彩される。

第49号住居跡（第105図）

Ｉ～Ｊ－23グリッドに位置する。北東側第47号住居跡が存在する。住居跡の北壁と南壁が攪乱を受けて消失する。

住居跡のプランは南北方向にやや細長い長方形で、主軸を南北方向にとるものと思われ、現存する住居跡の大きさは短径5.2m×深さ0.1mである。住居跡の主軸方向はN-40°-Eであった。

炉は住居跡の長軸方向上の中央部の北壁に寄った部分に存在し、P1とP2を結ぶ線のやや内側に位置する。住居跡はP5、P7、P8、P9の４本を主柱とする構造と思われる。

炉は南北方向に細長い楕円形で、長径0.81m×短径0.47m×深さ0.06mである。柱穴はP1＝長径0.65m×短径0.5m×深さ0.7m、P2＝長径0.72m×短径0.65m×深さ0.71m、P3＝長径0.56m×短径0.45m×深さ0.72m、P4＝長径0.65m×短径0.36m×深さ0.7m、P5＝長径0.7m×短径0.43m×深さ0.3m、P6＝長径0.53m×短径0.5m×深さ0.2mである。

壁溝は東壁に検出された。

出土遺物は、台付甕の脚部が１点出土した。

１は台付甕の台部である。外面は、刷毛目調整の後、ナデられている。体部内面及び台部内面は篦削りが施されている。

第50号住居跡（第106図）

Ｍ－22～23グリッドに位置する。南側に第48号住居跡が隣接し、北東側に第14号住居跡が存在する。第63号溝と重複したり、削平等で南西コーナー部分と柱穴のみが現存する。

柱穴の配置から、南北方向に細長い長方形で、主軸を南北方向にとるものと思われる。現存する住居跡の大きさは短径5.2m×深さ0.1mである。

炉は消失しているが、P1、P2、P3、P4の４本を主柱とする構造と思われる。

柱穴はP1＝長径0.27m×短径0.25m×深さ0.17m、P2＝長径0.24m×短径0.23m×深さ0.22m、P3＝長径0.34m×短径0.31m×深さ0.32m、P4＝長径0.45m×短径0.35m×深さ0.7m、P5＝長径0.4m×短径0.35m×深さ0.27mである。

壁溝は、現存部分には存在していた。

出土遺物は、南壁の周溝上から壺１が出土した。

１は壺で、底面は、周囲がドーナッツ状に若干高く、上げ底になっている。体部外面は、細かな篦磨きが丁寧に施され、赤彩されている。内面はナデられているが、底部と体部上半部の接合痕が明瞭に観察できる。

Ⅶ. 古墳時代後期の調査

1．調査の概要

新屋敷遺跡は大宮台地の北辺にあたる元荒川に面した標高14～19mほどの緩斜面部に立地している。遺跡の南側には大規模な埴輪製作遺跡として著名な生出塚遺跡が広がり、同一の遺跡群として把握されている。周辺には古墳時代後期の集落跡である中三谷遺跡や笠原古墳群が所在する。また、遺跡の北西約7.5kmには埼玉古墳群が位置している。

今回のC区の調査では先土器時代から古墳、平安、中・近世におよぶ各時代の遺構、遺物が多数発見された。ここでは調査の中心となった古墳時代後期の概要について説明する。

検出された主な遺構は、古墳跡36基、埴輪棺1基、土壙墓5基である。調査を実施した古墳跡のうち4基（第1・2・4・22号墳）は過去の調査において既に確認されていたもので、新しく32基の古墳跡を調査したことになる。

古墳跡は、墳丘が完全に削平されており、ほとんどが周溝部分のみの検出であった。唯一、第51号墳から木棺直葬による埋葬施設が確認されている。墳丘の形態はすべて円墳で、ほとんどが周溝の一部を掘り残して、ブリッジを作り出していた。ブリッジは西側に向くものが多く、その周辺からは土器や滑石製紡錘車が周溝底面に置かれた状態で出土している。

墳丘の規模は、最大で約19m、最小で約4ｍと幅があり、直径13m前後のものが最も多い。小型墳の多くは、大型墳に従属するような在り方を示し、直径6ｍ前後に集中している。古墳の分布状況は、地形により台地低位面、台地斜面部、台地上位面と大きく3群に分かれて立地していた。

注目される事例として周溝覆土中から5世紀末葉から6世紀初頭頃に降下したと考えられる群馬県榛名山二ツ岳の噴火に伴う火山灰、いわゆるFAが良好な状態で確認されたことが挙げられる。

埴輪は、調査された古墳のうちの9基ほどに伴っており、相対的に墳丘規模の大きい古墳に伴う傾向が認められた。2条突帯の円筒埴輪を中心に、朝顔形埴輪、形象埴輪が出土している。形象埴輪の種類は人物、馬、犬、大刀、家形埴輪等が出土している。第22号墳は墳丘径10mに満たない小型の円墳であるにもかかわらず、男子4体、女子2体、馬等の充実した内容の形象埴輪群が樹立されていた状況が明らかとなった。

出土した土師器は鬼高Ⅰ式の模倣坏を主体とし、高坏、壺、直口壺、甕などが出土している。他に第35号墳からは須恵器の有蓋高坏（TK47型式併行）が2点出土しており、古墳の築造時期を示す貴重な資料を得ることができた。

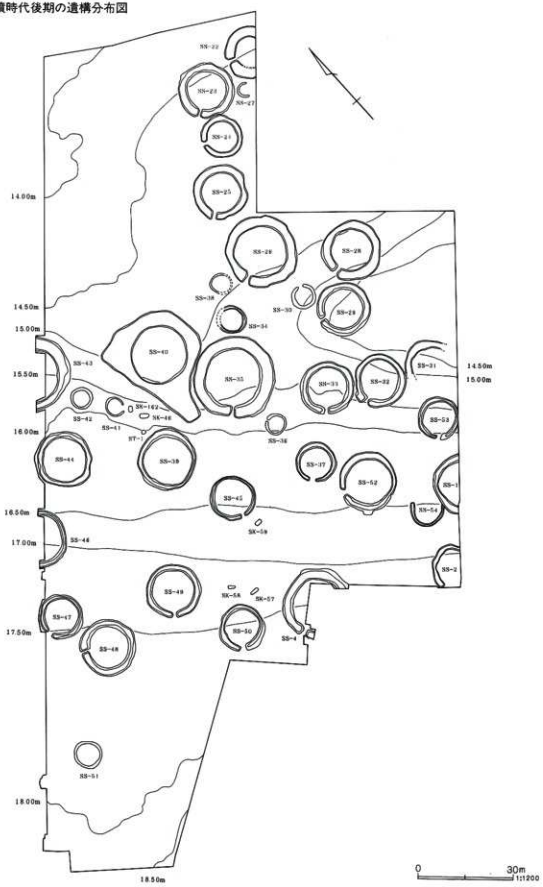
この古墳群の大きな特徴として、ブリッジ付近の周溝底面に供献土器とともに滑石製紡錘車が供献されている例が多数確認されている。今回の調査では11基の古墳から出土し、A・B・D区の調査でも確認されており、かなりの高い割合で副葬された状況が窺われる。またD区第58号墳からは2頭の鹿を線刻した紡錘車が出土しており、紡錘車が葬送儀礼において重要な役割を果していたと言えよう。さらに剣形の滑石製模造品やミニチュア土器等を共伴している例もあり、葬送儀礼を復元する上で大きな手がかりとなろう。

埴輪棺は第39号墳の外側に単独で位置し、楕円形の墓壙の中に4条突帯の大型円筒埴輪2個体を用いて、小口、透孔、合口の各部を埴輪片と白色粘土を用いて塞いでいた。当遺跡における埴輪棺の発見例は、昭和62年の第2次調査に次いで2例目となる。

古墳の他に土壙墓と推定される5基の土壙が検出されている。副葬品はほとんどなく、墓と断定する根拠に乏しいが、古墳群内部における墳丘を伴わない無墳丘墓の存在を示唆する事例として貴重である。

現在までに新屋敷遺跡で確認された古墳の数は、隣接するD区の調査成果なども考え合わせれば既に70基を越しており、かつては総数100基前後の元荒川流域における最大規模の古墳群であったと想定される。

第170図　古墳時代後期の遺構分布図



今回の調査の大きな成果は、古墳の築造時期を示す多量の土器、埴輪が検出されたことと、周溝から確認された火山灰によって古墳群の形成開始時期が5世紀後半まで遡り、6世紀前半を中心に形成された古墳群の様相が判明したことが挙げられる。

さらに、不明な点の多かった生出塚埴輪窯跡群の操業開始時期の様相を示す、5世紀後半から6世紀前半の良好な埴輪の資料が出土した点も特筆される。とりわけ第35号墳出土の〝二又の冠を被る男子埴輪〟は埼玉古墳群内の梅塚古墳から出土した男子埴輪に顔の作りや細部の特徴が酷似しており、埼玉古墳群との深い結びつきが予想される。

2．古墳跡

第1号墳（第108～110図）

調査区中央東寄りのⅠ－26、Ｊ－26・27グリッドに位置し、東半分は調査区域外にかかる。隣接する道路部分は、鴻巣市教育委員会が第1次調査を実施しており、その際に周溝の一部が検出されていた。今回の調査により周溝内径約14.36m、周溝外径19.24mを測る中型の円墳であることが明らかとなった。

周溝西側は後世の攪乱によって地山部分まで削平され、周溝は一部消滅していた。周溝の南西側で第54号墳の周溝と重複し、それを切っていた。今回の調査では唯一の古墳相互の切り合い関係を示す例である。また北東側の周溝は第120号土壙に切られていた。

確認面における墳丘部の平面形態は、やや歪んだ半円形を呈し、墳丘盛土は既に削平され、内部主体は検出されなかった。周溝の幅は2.72～1.76mで、断面逆台形を呈し、墳丘側の立ち上がりが急であるのに対し、外側は緩やかである。周溝底面は比較的平坦で、深さは0.72mを測る。確認部分ではブリッジは検出されなかった。

周溝の覆土は基本的に5層に分けられる。最下層の第7層はローム ブロック・粒子を多量に混入する暗黄褐色土で、この層からの出土遺物はほとんどない。これは周溝掘削土による埋め戻し土と考えられ、築造当初は溝底面を形成していたものと想定される。覆土最上層には天明3年（1783）噴火の浅間A軽石の混入が少量確認されているが、他にFA等の火山灰は確認されなかった。出土した円筒埴輪の様相からすればFA降下後の築造と推定される。

遺物は、土師器（坩・鉢・ミニチュア）、円筒埴輪、形象埴輪（人物・馬・家）等が出土した。第120号土壙の周辺に集中しているほかは、周溝内に点在した在り方を示している。すべて覆土上層から浮いた状況で出土した。第120号土壙は周溝覆土を切り込んで構築されたもので、直接遺構に伴う遺物がなく、時期は不詳である。覆土中から当墳に伴うと考えられる遺物が検出されているため、ここで一括して説明する。

遺物の出土状況は、第120号土壙周辺から1・2の土師器坩・鉢、5・7・14・15の円筒埴輪、18・19・20の人物埴輪、21の家形埴輪、17・22・23の馬形埴輪等が出土した。土壙周辺に形象埴輪の破片が集中していることから、本来の形象埴輪の樹立位置をある程度反映している可能性が高い。

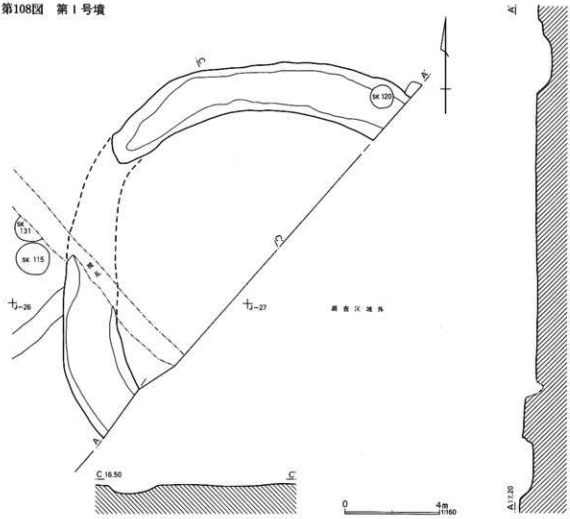
また周溝の南西側からは4の円筒埴輪が単独で出土しているほか、3のミニチュア土器が出土した。

第110図1の坩は頸部より上を欠損し、外面に箆磨き、内面に木口撫でを施す。2の鉢は内外面赤彩を施し、内面に棒状工具による箆磨きを丁寧に施す。両者は型式的特徴から和泉期に位置づけれるもので、周辺の住居跡からの混入と推定される。3は周溝の中層から出土したミニチュア土器である。口縁部を欠損しているため全体の器形は不明であるが、手捏ねによって成形されている。葬送儀礼に伴う祭祀用土器であろう。

埴輪の出土量は全体としては少ないが、第1次調査の際にも検出されており、本来埴輪が樹立されていたものと推定される。

4～16は円筒埴輪の破片である。このうち全体のプロポーションの判るものはないが、4は口径21.6cmを測り、比較的細身の2条突帯と推定される。胎土は白色・赤色粒子を混入し、焼成の良好なものが多い。色調は橙褐色から暗赤褐色の幅が見られる。透孔は円形

第108図　第1号墳



で、突帯がきわめて低いのが特徴である。外面調整は縦ハケ、内面調整は横ないし斜めハケを施す。底部調整は14に板押圧が認められる。

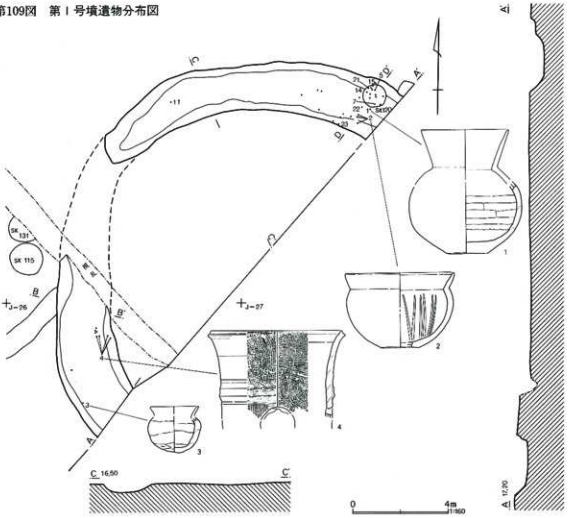
6・15・16は、器肉が厚く、径の大きなものに復元される。おそらく大型の円筒埴輪であろう。混入したものと推定される。

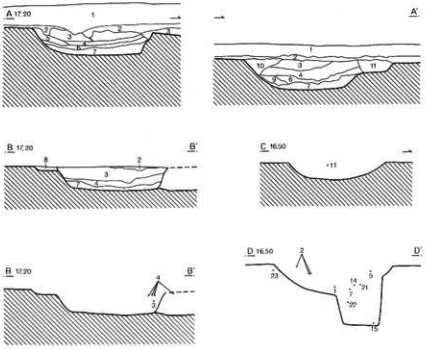
なお、第1次調査で出土した円筒埴輪の特徴は、最下段がやや長くなり、突帯がきわめて低いもので、今回出土した円筒埴輪と概ね共通した様相を示し、時期的には6世紀後半代に位置づけられている。

17～26は形象埴輪を一括した。17は馬形埴輪の鞍と推定される。18は女子人物埴輪の髷である。粘土板成形で、粘土紐を貼付して結髷を表現する。19は人物埴輪の右腕の付け根部分の破片である。中実作りで、残存部は撫でを施す。20は人物埴輪に付属する刀子の破片である。柄から鞘にかけての破片で、柄と鞘の境には粘土紐を貼り付けている。木装、あるいは鹿角装刀子を模したものであろう。外面には部分的に赤彩痕が残る。類例には生出塚遺跡18・20号窯跡例がある。21は家形埴輪の壁体部分の破片である。内面の剥離痕の状況からすると隅角部と推定されるが、小片のため明確な部位は不明である。22は馬あるいは動物埴輪の脚部の破片である。切開再接合成形技法で、板押圧による底部調整を施す。23は馬の立髪の破片である。両面ともハケ目調整後、端面に布撫でを施す。26は馬の耳と推定される。24・25は器種不明の破片である。24は円盤状の破片で、薄い粘土板である。25は突帯部分の剥離したもので下端は面取りされている。

築造時期については、円筒埴輪の特徴が生出塚遺跡III期の様相を示していることから、6世紀後葉段階に

第109図　第Ⅰ号墳遺物分布図

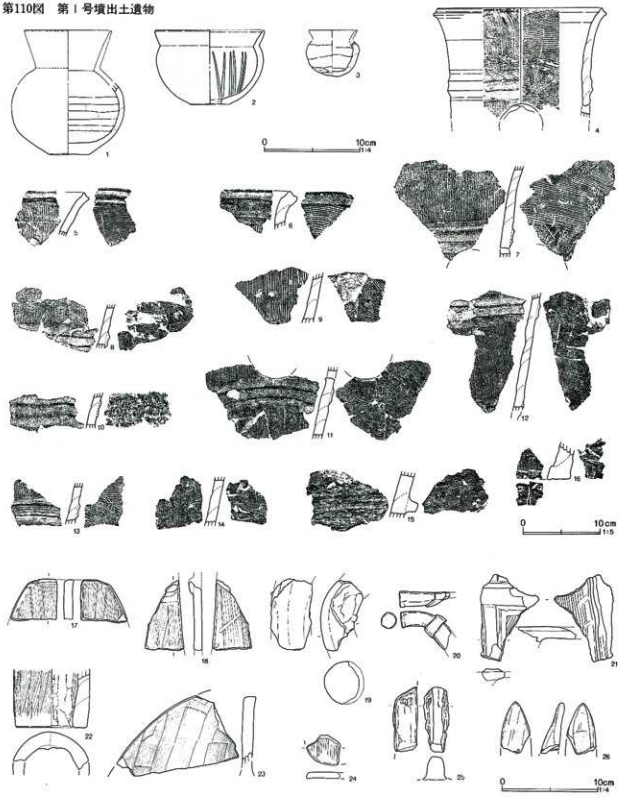




SS1

1	表　　土	
2	明灰褐色土	浅間A粒子少量
3	暗 褐 色 土	ローム粒子多量
4	暗 褐 色 土	ローム粒子多量
5	暗黄褐色土	ローム粒子多量
6	暗 褐 色 土	ローム粒子少量
7	暗黄褐色土	ローム粒子多量
8	暗黄褐色土	ローム粒子少量（SS54覆土）
9	暗黄褐色土	ローム粒子多量
10	暗 褐 色 土	ローム粒子少量
11	暗 褐 色 土	ローム粒子・黒褐色土粒子少量

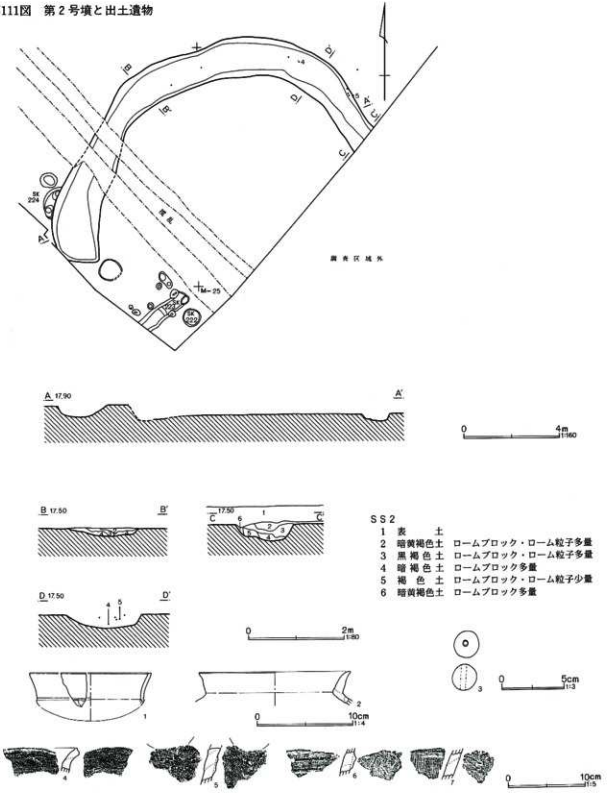
第110図　第1号墳出土遺物



第1号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	坩	9.2	7.5	4.2	BEF	A	橙褐	90	
2	鉢	(11.4)	7.8	(4.1)	BEF	A	淡褐	90	赤彩
3	ミニチュア		(3.6)		BF	A	淡褐	80	

第111図　第２号墳と出土遺物



第２号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	坏	(12.8)	(3.6)		BEF	A	橙褐	10	
2	甕	(15.9)	(3.6)		ABFIJ	B	淡褐	10	
3	土玉					A	淡褐		外径2.0 孔径0.4 厚さ2.1cm

位置づけられる。今回の調査では最も新しい時期に築造された古墳のひとつである。

第2号墳（第111図）

調査区中央南東隅のH－24・25グリッドに位置し、南側約2分の1は調査区域外にかかる。隣接する道路部分は鴻巣市教育委員会によって調査され、当墳の周溝の一部が検出されている。全体の3分の1ほどが未調査になっているため全容は不明であるが、周溝は半円形に途切れ、2か所にブリッジをもつ円墳の可能性が高い。墳丘部の規模は、周溝内径11.68m、周溝外径14.0mと推定される。墳丘部と周溝の一部は後世の攪乱により地山部分まで大きく削平を受けていた。

確認面における墳丘部の平面形態は、やや歪んだ半円形を呈し、墳丘盛土は既に削平され、内部主体は検出されなかった。周溝幅2.08～1.02mを測り、北側でやや幅を狭める。周溝底面は比較的平坦であるが、北側から北西側にかけては削平のため全体に掘り込みが浅く、深さ0.44mを測る。ブリッジの形状については一部調査区域外にかかるため明確でないが、ハの字状に大きく開くようである。

周溝覆土は大きく3層に分けられる。最下層にはロームブロックを多量に混入する暗褐色土が堆積し、その上に墳丘流入土と想定されるロームブロック・粒子を多量に混入した黒褐色土・暗黄褐色土が堆積する。覆土中にはFA等の火山灰は確認されなかった。出土遺物の様相からFA降下後の築造と推定される。

遺物は周溝覆土中から土師器坏、甕、土玉、円筒埴輪片が出土した。

第111図1は模倣坏の口縁部の細片からの復元実測である。口径12.8cmを測り、口縁部はやや開き気味となるようである。2も同じく甕の口縁部片からの復元実測である。くの字状口縁を呈する。3は直径2.1cm、孔径0.4cmの土玉である。

4～7は円筒埴輪の破片である。埴輪片は図示したもの以外は細片が多く、量的にも少ないことから、周囲の古墳からの流れ込みと推定される。

築造時期については、出土した坏の口縁部が緩やかに外反しており、鬼高II式の特徴を示すことから、他の古墳に比べやや後出的な要素が認められる。また周溝覆土中にFAが検出されていないことから6世紀中葉以降の築造であろう。

第4号墳（第112～121図）

調査区中央のJ・K－20～22グリッドに位置し、周溝南側は調査区域外にかかる。隣接地を昭和62年に鴻巣市教育委員会が調査を実施しており、その際に周溝の一部が確認されていた。今回の調査によりブリッジを南西にもつ、周溝内径16.52m、周溝外径22.80mの大型の円墳であることが明らかとなった。周囲には西側に第50号墳、南側に第6号墳が所在する。墳丘部分は北東から南西にかけて第65号溝が重複するほか、第64号溝、第8号棚列等によって壊されていた。

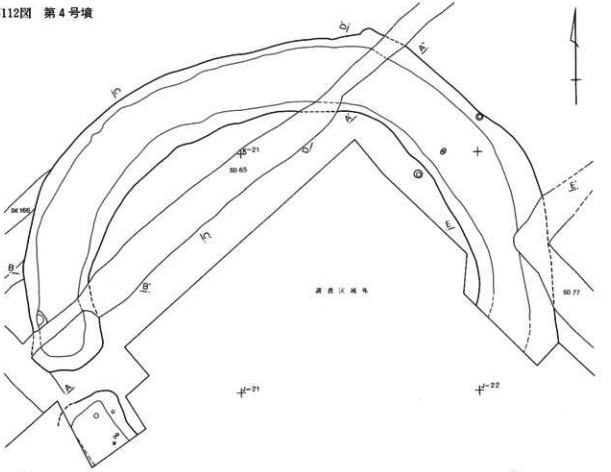
墳丘部の平面形態は、比較的形の整った円形を呈する。周溝はほぼ一定の幅で巡り、内外の立ち上がりの緩やかな断面レンズ形で、底面は概ね平坦である。周溝幅4.0～2.7m、深さ0.92mを測る。ブリッジは第64号溝に壊され、一部調査区域外にかかるため全容については明確でないが、南西方向に撥形に開口するものと推定される。主軸方向はN-110°-Wを示す。

周溝覆土は大きく6層に区分される。最下層の第7層はロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で、レンズ状に薄く堆積していた。そして暗褐色土の第6層を間層に挟んで、その上層にFAブロック・粒子を含む第4・5層がレンズ状に堆積する。第5層はFAの純堆積層に近く、周溝溝底から20～30cmほど浮いた覆土中層に位置している。第3層は墳丘盛土の流入土と考えられるもので、この層の中から大量の円筒埴輪片が検出されたが、原位置をとどめるものはなかった。

遺物は土師器坏・甘、須恵器甕、滑石製紡錘車、刀子、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人物・家・不明）等が出土した。

遺物の出土状況は、ブリッジ右脇の溝底面から土師器坏3、紡錘車1、刀子1がまとまって検出されている。第115図1・2の坏は口縁部を上にして並んだ状態で置かれ、その南側から3の坏が伏せられた状態で検

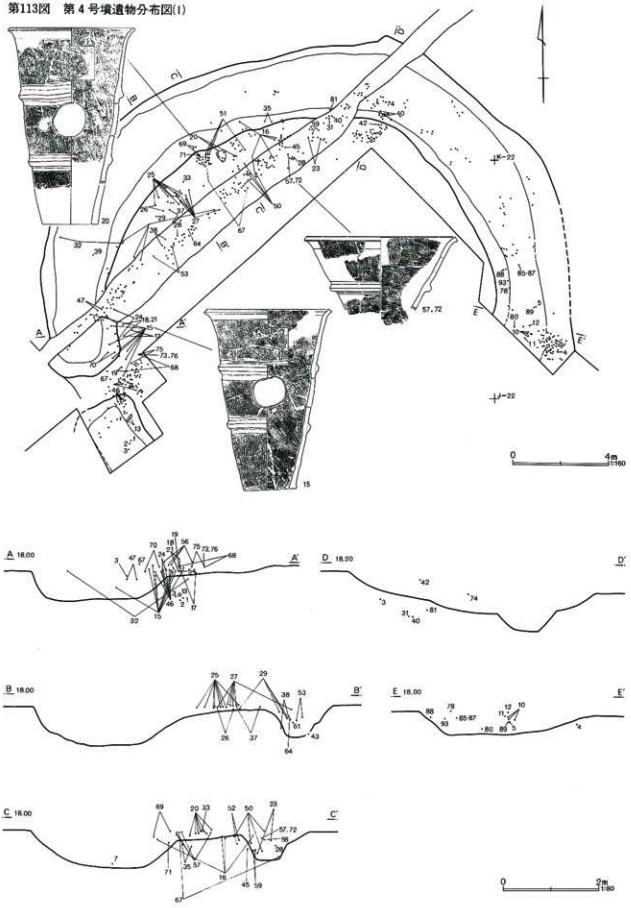
第112図　第４号墳



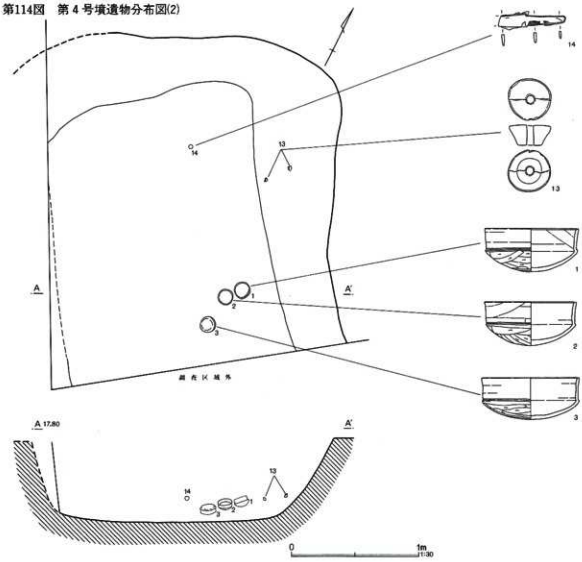
ＳＳ４
1　耕　作　土
2　黒褐色土　ローム粒子少量
3　暗黒褐色土　ローム粒子多量
4　暗褐色土　ＦＡ粒子・ローム粒子少量
5　暗褐色土　ＦＡブロック
6　暗褐色土　ローム小ブロック少量
7　暗黄褐色土　ロームブロック多量
8　明褐色土　ロームブロック少量
9　褐　色　土　ローム粒子少量

0　2m　1:80

第113図　第４号墳遺物分布図(I)



第114図　第４号墳遺物分布図(2)

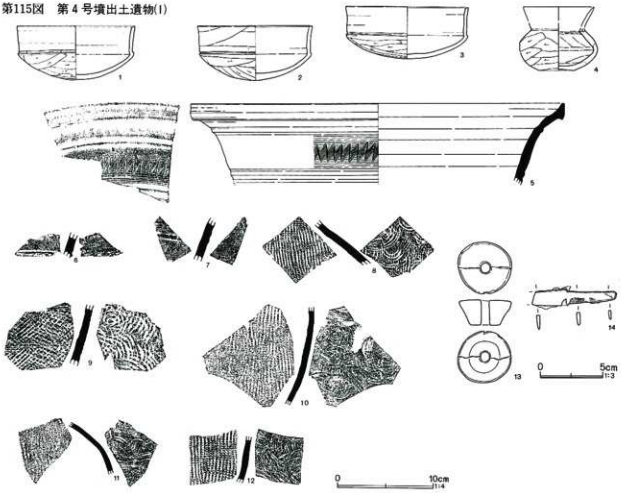


出されている。出土した坏はいずれも定形化した模倣坏である。１・２は同形同大で、調整技法も酷似していることから同一の製作者による製品と推定される。３は１・２に比べ口径が大きく、体部が浅く偏平である。これは土器の供献行為において、意図的に土器が選別され、異なる配置方法が取られたことを示す事例として注目される。13の紡錘車は墳丘裾から二つに割れた状態で、20cmほどの距離を置いて検出された。人為的に破砕された可能性も考えられるが、断面の観察では明確にできなかった。また紡錘車の西側約70cmの位置から切先部分を欠損した14の刀子が出土している。これらの遺物は、周溝底面から僅かに浮いた位置から出土しており、築造当初に周溝底面に一括して供献されたものと推定される。同様にA区第13号墳でもブリッジ脇から刀子が坏・紡錘車に伴って出土した例が確認されている。

なお、第２次調査の際にも周溝南側から模倣坏が出土しており、周溝の数か所に供献土器を配置した分散型の在り方を示していることが明らかとなった。

埴輪は、墳丘部が第65号溝によって削平を受けているため良好な状態ではなかったが、ブリッジ周辺から北側の墳丘肩部にかけて円筒埴輪片が多量に検出されている。いずれも原位置をとどめるものはなかったが、周溝内部に流れ込まずに、墳丘肩部にまとまった状況を示していた。出土した埴輪の多くは、旧表土層の流入土と考えられる第３層を中心に検出されたことから、

第115図　第４号墳出土遺物(1)



第４号墳出土遺物観察表

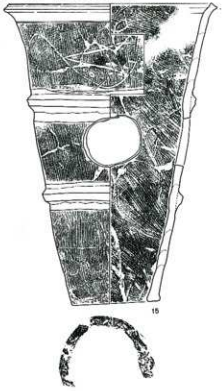
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	坏	12.3	5.7		BE	A	橙褐	100	
2	坏	12.1	5.7		BEF	A	橙褐	100	
3	坏	12.8	5.5		BEF	A	赤褐	100	
4	坩		(5.0)	3.7	BFI	A	赤褐	80	
5	甕	(39.4)	8.5		BG	A	黒褐	10	
6	甕				BG	A	青灰		
7	甕				BG	A	黒褐		
8	甕				BG	A	青灰		
9	甕				BGJ	A	灰		
10	甕				BG	A	暗灰		
11	甕				BG	A	暗褐		
12	甕				BF	A	暗褐		
13	紡錘車								外径4.2 孔径0.7 厚さ2.0cm
14	刀子								長さ(6.7) 身幅1.3 棟幅0.25cm

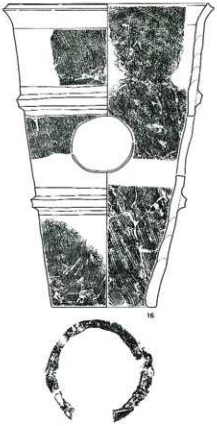
築造当時は墳丘部の周縁にテラス面が形成され、その部分に埴輪列が樹立されていたと推定される。

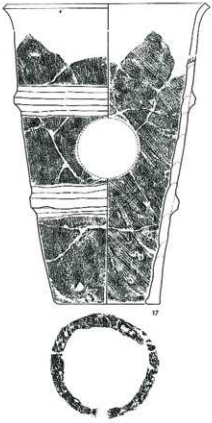
円筒埴輪（第116～120図）は、いずれも２条突帯３段構成のもので、各段の幅がほぼ均等なプロポーションである。大きくA～C類の３類に分類され、さらにA類はA1・A2類に細分できる。このうちA類とした一群は全体の約９割近くを占めており、規格的な製品が多く、全体に斉一性を窺わせる。

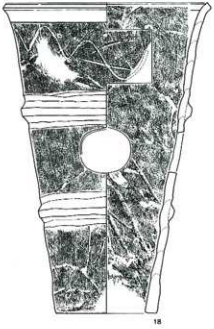
A1類（15～21・23・27～29・31・32・34～40・42～44・47～50・52～54・57・58・60～64・68）は、硬質に焼

第116図　第４号墳出土遺物(2)



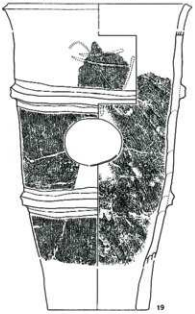


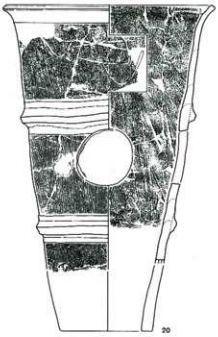


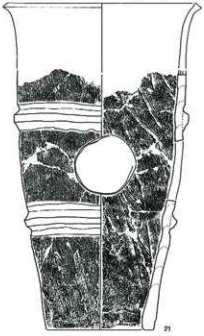


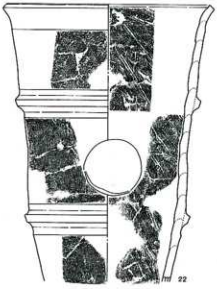
0　10cm
1:5

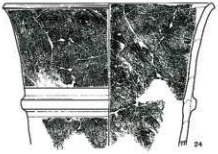
第117図　第４号墳出土遺物(3)





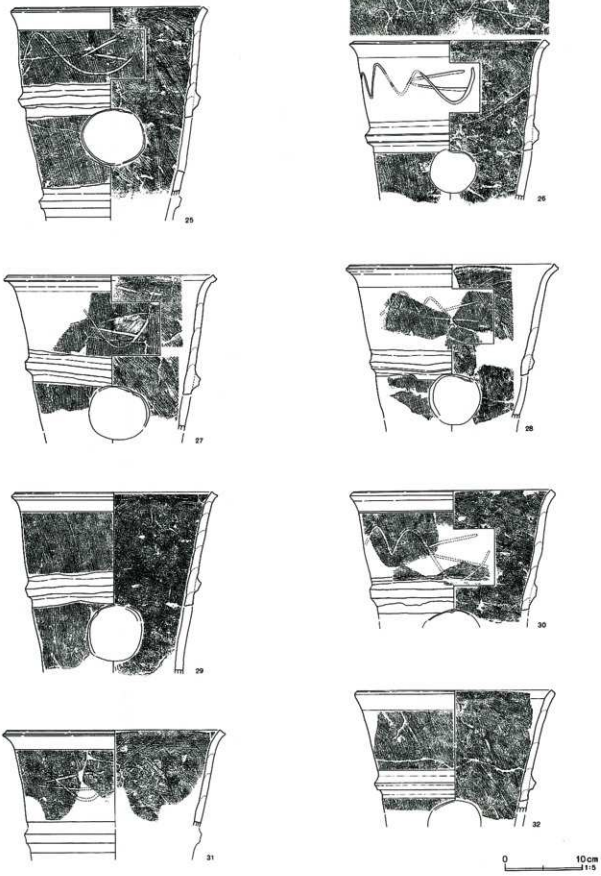




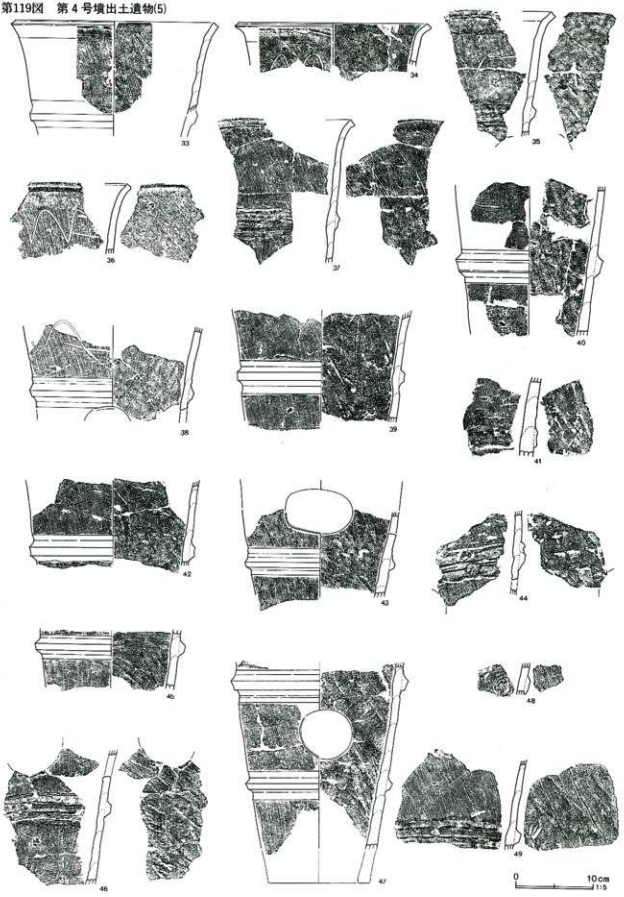


0　10cm
1:5

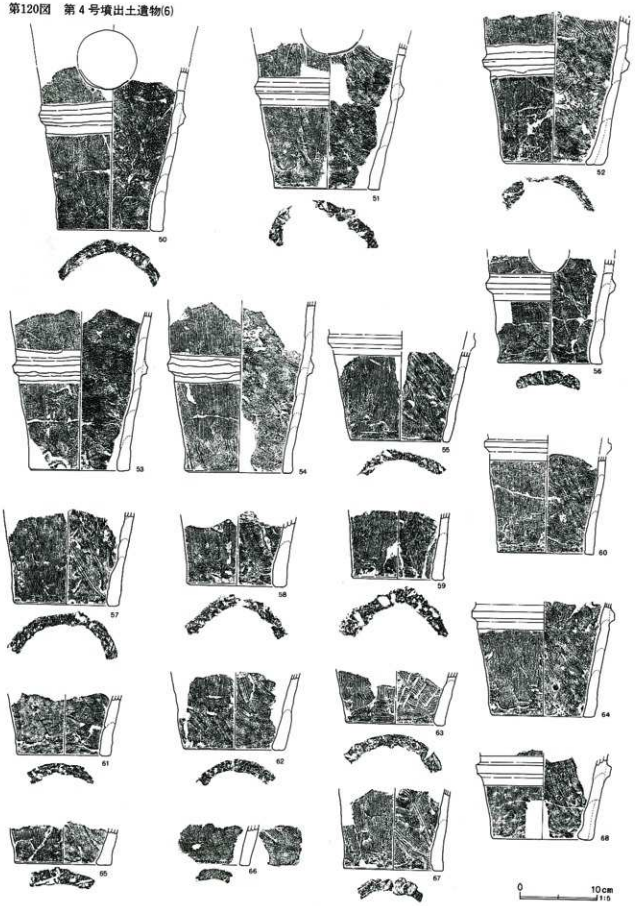
第118図　第４号墳出土遺物(4)



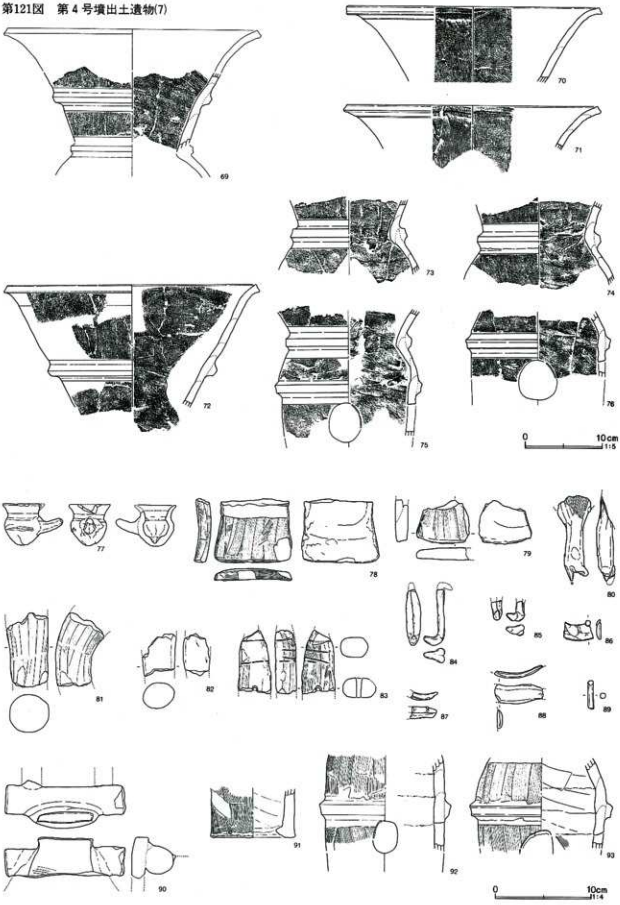
第119図　第４号墳出土遺物(5)



第120図　第４号墳出土遺物(6)



第121図　第４号墳出土遺物(7)



き上がり、色調は明るい橙褐色を基調とするものである。口径約27.6cm、底径約13.2cm、器高約40cmを測る。各段の高さは、第１段（基底部）が13.7cm前後、第２段が13.7cm前後、第３段（口縁部）が13.3cm前後である。形態の特徴は基底部から直線的に開いて立ち上がり、口縁部で緩やかに外反する。口唇部は端部に凹面を作り出し、内面が浅く凹むものが多い。突帯は台形が多く、透孔は円形で楕円形に近いものもある。外面には縦ハケを施し、口縁部に緩い斜めハケを施す。基底部外面に篦撫で部分を残すのが大きな特徴である。内面は口縁部が横ハケ、下位は斜めハケを施す。

A２類（24～26・30・33・51）は、細部の形態や調整手法の特徴は基本的にA１類に共通しているが、色調が暗灰褐色を基調とする、いわゆる須恵質のものを指標とした。

B類（46・55・56・67）は、胎土に砂礫の混入が目立つ堅い焼き上がりのものを指標とした。赤褐色を基調とする。底部の破片が多く全体の形は不明であるが、細部の特徴はA類に近い。底径13～13.8cmを測る。

C類（22・45・59・65）は、赤色粒子の目立つ砂っぽい胎土で、柔らかい焼き上がりである。色調は淡褐色を呈する。口径28cm、底径11.8～12.6cmを測る。

その他に混入と考えられる41の大型円筒の破片と66の底部調整を施した破片が含まれていた。

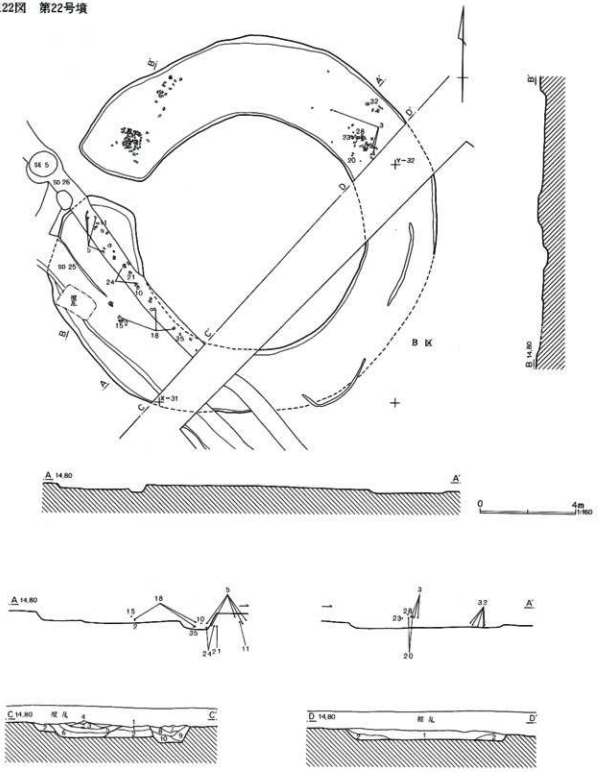
ヘラ記号は、２本の横線で横向きのV字形を描き、それに重なるように３ないし４つの山をもつ左上がりの波状文を描いた特徴的なもので、A類のみに認められた（15・18～20・25～28・30・31・34～36・38）。このヘラ記号の施文は、決まって透孔の真上の口縁部外面から描きはじめられており、透孔を正面とする約束事が存在したことを示唆している。おそらく呪術的な意味合いをもって描かれたのであろう。また図示しなかったが同一のヘラ記号の細片がこの他にも多数認められおり、A類にはかなりの頻度で描かれていたようである。他に76の朝顔形埴輪の肩部直下の段間にヘラ記号が見られるが、欠損部が多く明確でない。

第121図 69～76は朝顔形埴輪である。全体に肩部の張りが弱く、口縁部が直線的に開く。口唇部は大きく外反し、端部は凹面を呈する。口径は33cm前後である。胎土・焼成・色調などの特徴は円筒埴輪A類に共通するものが多く、72のみ円筒埴輪C類に類似した特徴が認められる。

形象埴輪は多量に出土した円筒埴輪に比べ、量的に少なかった。出土位置はブリッジ付近と周溝東側にまとまりが、多少見られた程度である。

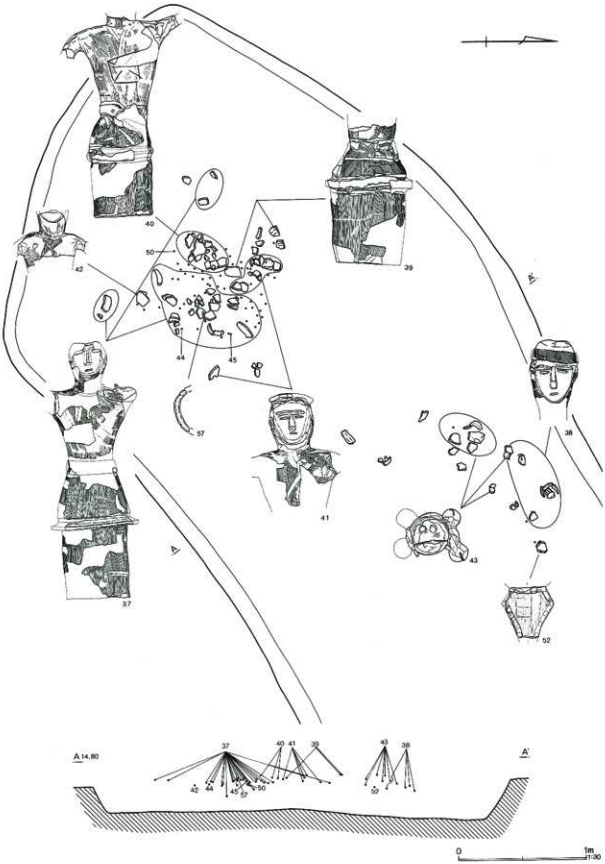
第121図77～93に形象埴輪を一括した。77は女子埴輪（巫女か）が捧げ持つた須恵器の瓶を表現したものである。実物の瓶を忠実に模倣しており、注口部を誇張する。78・79は女子埴輪の島田髷の破片である。80は男子埴輪の下げ美豆良である。棒状を呈し、先端部は二又に分かれる。81・82は中実作りの腕の破片である。81は残存部にハケ目を残し、胎土に白色粒子を多く含み、混入の可能性もある。82は残存部に撫でを施す。83は両端部を欠損し、図示した上端部は幅を狭める。残存部にはハケ目を施し、横線を４本線刻している。また下端の中央には小さな円孔が貫通する。種類・付属部位等は不明である。84・85は２本の粘土紐を貼り合わせ、両端をL字形に短く折り曲げたものである。付属部位等は明確でないが、福島県原山１号墳の女子埴輪に見られる耳孔から肩まで垂れ下がった耳飾りの表現に類似している。86は幅1.7cmの粘土帯の縁に粘土粒を貼付したものであるが、付属部位等は不明である。87は人物埴輪の指の部分と考えられる。粘土紐により別作りされたものである。88は薄い粘土板を二つに折り返したもので、弓なりになっている。外面は撫でを施し、剥離面にハケ目が残る。付属部位は不明である。89は直径0.6cmの丸い棒状の破片である。90は寄棟造の家形埴輪の屋根に取り付けられた堅魚木と妻隠し板と考えられる。両者は一体となって表現されている。堅魚木は長さ12.8cm、径3.1cm を測り、その下面には陳泥板の剥離痕が認められる。91は動物埴輪の脚部と推定される。底径９cmを測り、底部は肥厚する。92・93は形象埴輪の台部の破片と考えられる。朝顔形埴輪と比較するとやや小振りである。

第122図　第22号墳

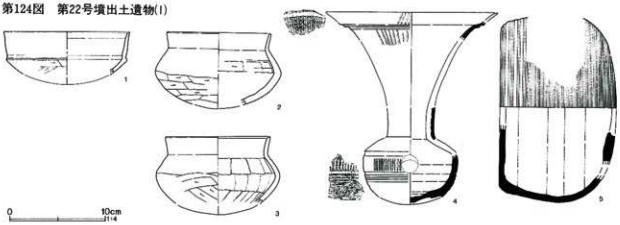


SS22
1　黒褐色土　ロームブロック多量
2　暗褐色土　ローム粒子多量
3　黒褐色土　浅間B粒子・ローム粒子少量
4　浅間Bブロック
5　黒褐色土　ローム小ブロック少量
6　暗褐色土　ローム小ブロック多量
7　暗褐色土　ローム粒子少量
8　黒褐色土　浅間B粒子少量
9　暗褐色土　ローム小ブロック少量
10　暗褐色土　ロームブロック少量

第123図　第22号墳遺物分布図



第124図　第22号墳出土遺物(1)



第22号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	坏	(13.2)	4.6		ABF	A	橙褐	10	
2	短頸壺	(10.9)	8.0		BEF	B	淡褐	60	
3	短頸壺	(11.0)	7.1		BE	A	暗赤褐	30	
4	甕				BG	A	灰	30	
5	提瓶				BG	A	暗灰	30	

築造時期については、出土した土師器坏が鬼高Ⅰ式の典型的な模倣坏であることと、円筒埴輪が山崎氏によって生出塚遺跡Ⅰ期の指標とされていることから考え合わせると、6世紀前葉を中心とする時期が想定される。

第22号墳（第122～129図）

調査区北端のX・Y－30・31グリッドに位置する。平成3年度に調査を実施したB区に隣接し、その際に周溝の一部が検出され、所在が確認されていた。今回の調査により、西側に向くブリッジをもつ、周溝内径9.92m、周溝外径15.52mの小型の円墳であることが明らかとなった。周囲には南西に第23号墳、南に第27号墳、東にB区第19号墳がそれぞれ近接している。現状ではB区を中心とした低位面の一群の中では最も北側に位置する古墳である。墳丘の南西端とブリッジの一部が第25・26号溝によって壊されていた。

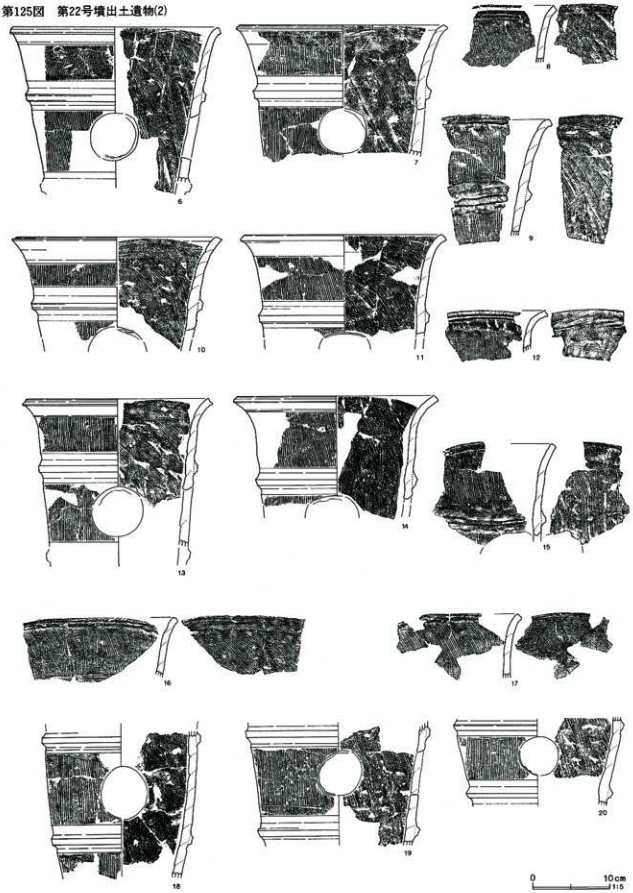
墳丘部の平面形態は、比較的形の整った正円形に近いものである。周溝は墳丘径に対して幅が広く、周溝幅3.84～3.2mを測る。深さ0.24mと掘り込みが浅く、溝底面は概ね平坦である。このように幅広の浅い周溝形態は、多種多様な形象埴輪群を樹立していたB区第15号墳に類似する。ブリッジは西側を向き、撥形に開く。主軸方向はN－69°－Wを指す。

周溝覆土は大きく2層に区分される。覆土中にFAの混入が見られないことからFA降下以後の築造と想定される。なお第3～10層は第26・25号溝の覆土に相当し、上層に浅間B軽石の堆積が認められることから溝の掘削時期が古代まで遡ることが判明した。

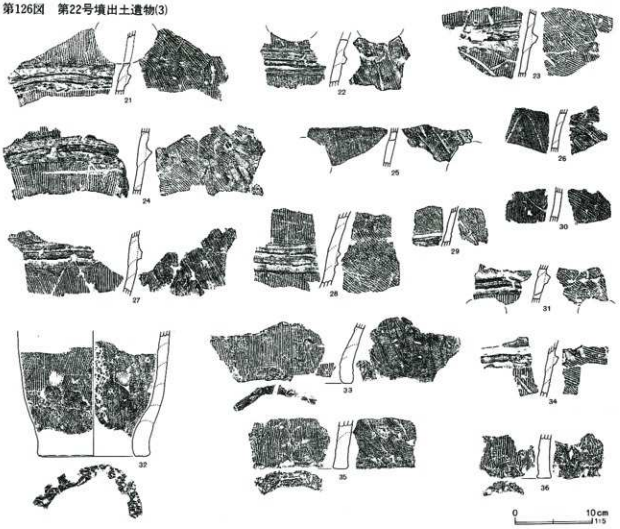
遺物は、ブリッジ左脇から人物・馬などの形象埴輪がまとまって出土したほかに、土師器坏・短頸壺、須恵器甕・提瓶、円筒埴輪等が検出された。

第124図1の坏はブリッジ右側の周溝覆土内から検出されたもので、小片からの復元実測である。体部が浅く、口縁部が外傾して立ち上がり、模倣坏としては新しい様相が窺われる。2・3は短頸壺で、2は周溝の南西側から、3は周溝の北東側から破片の状態で出土した。4の須恵器甕は、ブリッジ右側の第26号溝の覆土中から破片となって出土したもので、確実に古墳に伴う遺物とは断定できない。図上復元したため器形は明確でないが、偏円形の体部に大きく開く口縁部をもつものと推定される。体部に縦位の櫛描烈点文、頸部下半は無文で、頸部上半と口縁部に斜位の篦描文を

第125図　第22号墳出土遺物(2)



第126図　第22号墳出土遺物(3)



施す。TK43型式期に位置づけられる。5の提瓶も第26号溝の覆土中から出土し、帰属は判然としない。全体の器形は不明であるが、体部の側面が平坦な偏円形を呈し、体部外面にカキ目を施している。

埴輪の出土状況は、ブリッジの左側に形象埴輪が集中していたほかは周溝内に散在した状態で円筒埴輪が出土し、東側の調査区際に小規模なまとまりが認められただけである。

円筒埴輪は全体のプロポーションの判るものはないが、基本的には2条突帯3段構成のものと推定される。大きくA・B類の二つに分類される。

A類（6・7・9～11・13～23・25・27・32・33・35）は、胎土に砂粒の混入の少ない精選されたもので、焼成良好である。色調は赤褐色を基調とする。底部から直線的に開き、口縁部で緩やかに外反するものと考えられる。口径は25.2～27.9cmを測り、最上段の幅が10cm前後と短いのが特徴である。32は底径15cm、残存高16.5cmで、基底部は大きく歪む。突帯は台形を呈するものが多い。透孔は円形で、突帯間の上寄りに穿孔されている。外面調整は縦ハケ、内面調整は横ないし斜めハケを施す。口縁部の横撫での範囲は広い。底部調整を施すものはない。6の内面に縦位の3本の篦描きを施す。23は外面に×印が見られ、施文位置は第2段部分と考えられる。

B類（24・30・31・34・36）は、A類に比べ焼きが甘く、色調は淡橙褐色を呈する。突帯は側面の上辺が突出した台形と24の三角形がある。24は突帯の直下に逆V字形のヘラ記号を描く。30は外面に×印を描く。31は突帯下に描かれた×印の一部であろう。

その他に周辺の古墳から混入したと考えられる破片

が含まれていた（8・12・26・28・29）。なお、出土した破片の中には明確に朝顔形埴輪と識別できるものは含まれていなかった。

形象埴輪はブリッジ左側の周溝覆土上層から細片となった状態で6体の人物埴輪と馬形埴輪がまとまって検出された。出土状況から樹立位置を復元することは困難であるが、37・39・40・41・42の人物が一群を形成し、その東側に38の男子と馬がセットとして配置されていたと推定される。

第127図37は女子埴輪で、右腕及び髷を欠損する。残存高67.2cm。両手を前方に差し出す姿態をとるものとみられるが、明確ではない。頭部は全体に膨らみをもち、耳孔の周りに幅広の円環を貼り付ける。頸部には粘土紐を貼付した頸飾りが見られる。腕は中空で、指先は別々の粘土紐で作られている。腰には帯が貼付されていたようである。着衣の裾はスカート状に大きく張り出す特徴的な表現である。この人物は他の人物よりも一回り大きく造形されており、中心的な人物を表現した可能性が強い。

38は男子埴輪の頭部である。残存高16.6cmを測る。粘土紐の巻き上げによって成形され、頭頂部には剝離痕が見られる。頭には鉢巻状のものを締め、美豆良、垂髪が表現されていたようである。面長な顔立ちで、額から顎にかけて三角形に赤彩を施す。

39は半身像の腰部から円筒台部にかけての破片である。残存高30.1cm。腰には粘土紐の貼り付けによって腰帯を表現し、剝離しているが正面には緒をハの字に垂らす。色調・胎土等は38・40・42と共通する。

第128図40は左手を上に挙げた半身像である。残存高42cm。頭部を欠損するため性別は判然としない。胸には線刻により四角に×印を重ねた文様を刻む。また指撫でにより着衣の襟元を表現している。腰には腰帯を表し、剝離しているが正面に緒をハの字に垂らす。腕の基部は粘土板を丸めて成形し、胴部に差し込んでいる。色調は橙褐色である。

41は女子埴輪で、残存高23.5cmを測る。端正な顔立ちで、眉と鼻は粘土紐でT字形に表現する。頭頂部のかなり上の方まで粘土紐を巻き上げて成形し、前後に2枚の粘土板を貼り付けて髷を表現する。耳は円形に穿孔した周りに円環を貼り付け、その下端にかかるように耳環と耳玉を貼付する。色調は赤褐色である。

第129図42は男子埴輪である。頭から顎にかけて赤彩を施し、顎は三角形に塗る。胸にはハケ工具により×印を描く。胴部に中空技法の腕を差し込む。

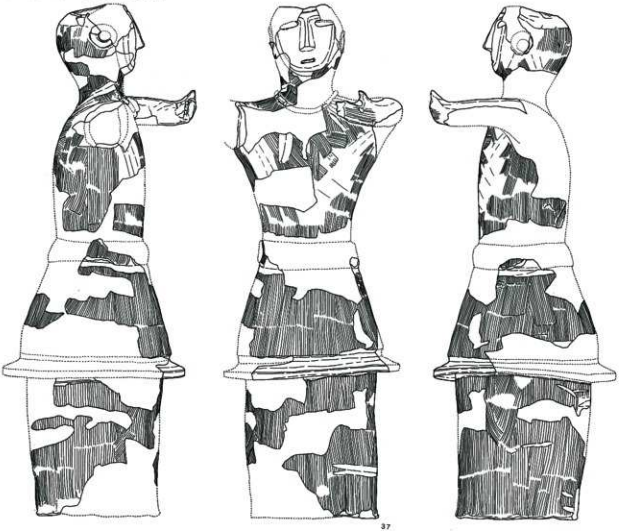
44～51は人物埴輪の破片である。44・45は女子埴輪の島田髷の破片である。46は耳部の破片で、円形の耳孔に接するように円環状の耳飾りを貼付する。47は棒状の破片で男子人物の下げ美豆良と考えられ、帯状に赤彩を施す。48・49は中空作りの腕の破片である。48の掌部分は撥形となる。49は2枚の粘土板を合わせて作られている。50は粘土紐の別作りで表現された指の部分である。51は人物埴輪の腰帯と考えられる破片である。外面に線刻により文様を描く。

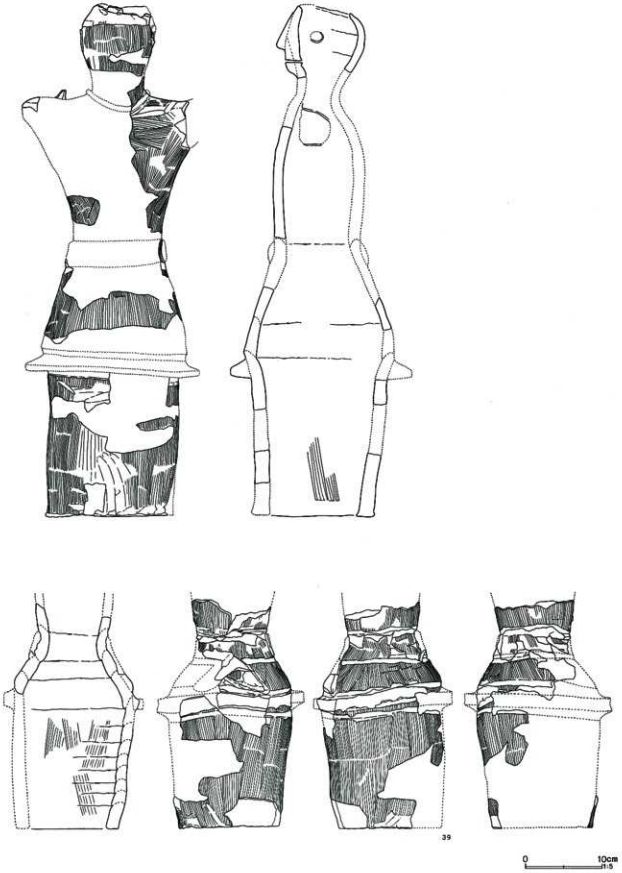
43・52～55は馬形埴輪の破片で同一個体の可能性が強い。43は大型の鈴が付属する轡を付けた馬形埴輪の頭部である。粘土紐の巻き上げにより円筒部を作り、先端部を2枚の粘土板で塞ぎ、鼻孔を開け、切り込みを入れて口を表現する。目は楕円形に開けられ、円筒部の下端には粘土板を貼り付け顎骨を表現する。鈴付鐙板の轡は剝離痕の観察から少なくとも四方に鈴が貼付されていたようである。実物の馬具と比較するとかなり鈴がデフォルメされており、鈴の音に対する何らかの意義づけがなされていたのであろう。B区第15号墳出土の三環鈴形土製品との関連が注目される。

52は飾り馬に装着された剣菱形杏葉である。偏円部及び剣先を欠損する。周縁に粘土紐を巡らし、その上に粘土粒を貼付して鋲留を表現する。53は鞍の前輪ないし後輪の破片で、三日月形のものであろう。54・55は馬の脚部で、粘土紐巻き上げ成形である。

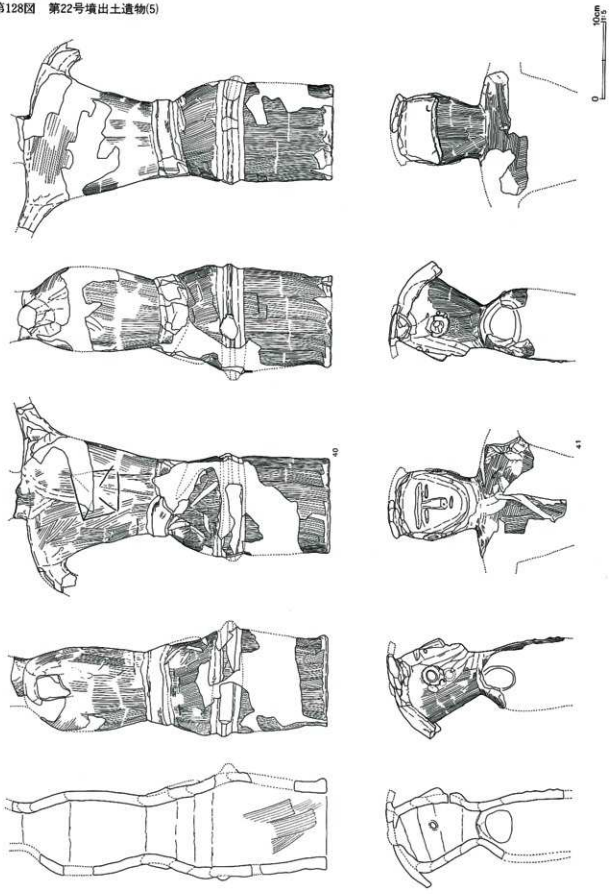
56～58は不明形象埴輪である。56は半円形の粘土板の側面に筐先を押し当て、鶏冠状に作られたものである。他に鶏形埴輪と考えられる破片がなく鶏とする確証はない。57は環状の粘土紐の側面に等当間に刻み目を入れている。環の直径は約7cmに復元される。腕輪

第127図　第22号墳出土遺物(4)

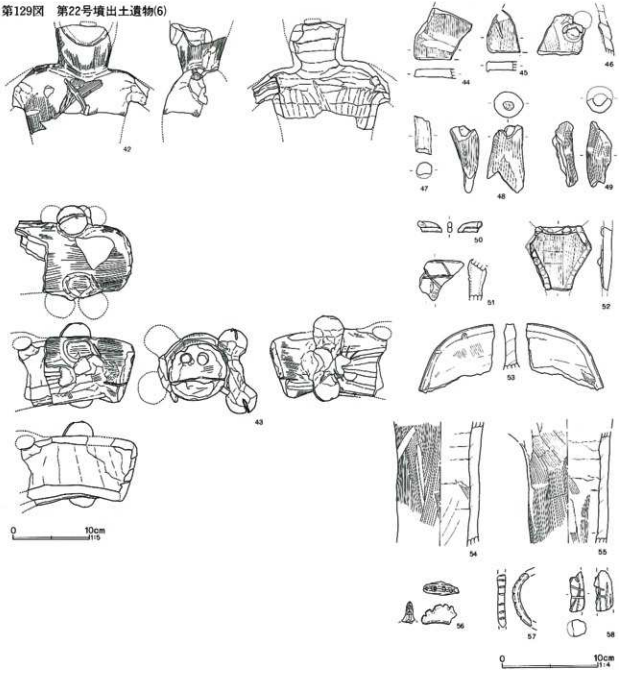



39
0
10cm
1:5

第128図　第22号墳出土遺物(5)



第129図　第22号墳出土遺物(6)



の模造品であろうか。58は断面円形の粘土紐に線刻を施したものである。

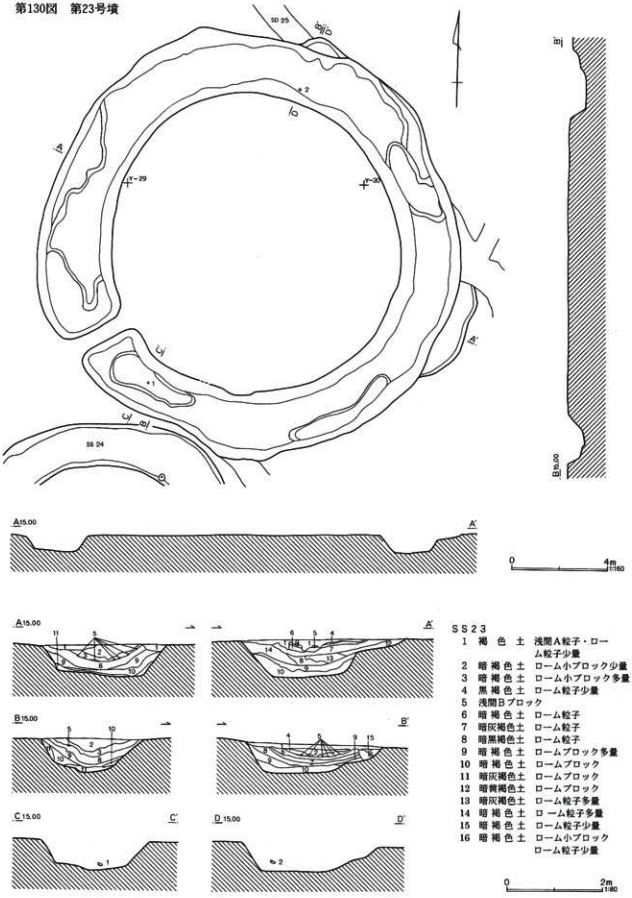
出土した円筒埴輪は口縁部の幅が狭く、新しい要素が窺われるが、突帯は台形でしっかりしており生出塚遺跡II～III期に位置づけられる。また形象埴輪の表現や製作技法の特徴はII期に併行する段階のものである。築造時期は概ね6世紀中葉から後葉頃であろう。

第23号墳（第130・第131図）

調査区北側のW－29、X・Y－28～30グリッドに位置する。低位面を中心に分布する古墳の中では北側に占地し、東に第22号墳、南東に第27号墳、南に第24号墳がそれぞれ隣接する。南西に開口するブリッジをもつ、周溝内径12.8m、周溝外径18.24mの中規模の円墳である。周溝の北東側は第25・26号溝が重複し、さらに第41・49号溝が周溝の南西側を壊していた。

墳丘部の平面形態は、比較的形の整った円形を呈し、墳丘盛土は既に削平され、内部主体は確認できなかった。周溝は南側に立地する第24号墳との重複を避ける

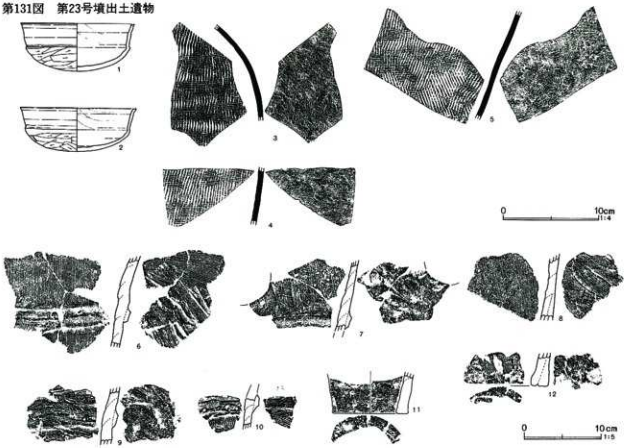
第130図　第23号墳



SS23

1　褐　色　土　浅間A粒子・ローム粒子少量
2　暗 褐 色 土　ローム小ブロック少量
3　暗 褐 色 土　ローム小ブロック多量
4　黒 褐 色 土　ローム粒子少量
5　浅間Bブロック
6　暗 褐 色 土　ローム粒子
7　暗灰褐色土　ローム粒子
8　暗黒褐色土　ローム粒子
9　暗 褐 色 土　ロームブロック多量
10　暗 褐 色 土　ロームブロック
11　暗灰褐色土　ロームブロック
12　暗黄褐色土　ロームブロック
13　暗灰褐色土　ローム粒子多量
14　暗 褐 色 土　ローム粒子多量
15　暗 褐 色 土　ローム粒子少量
16　暗 褐 色 土　ローム小ブロック
　　ローム粒子少量

第131図　第23号墳出土遺物



第23号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	坏	12.0	5.0		BEF	A	橙褐	100	
2	坏	12.2	4.5		BEF	A	淡褐	90	
3	甕				BG	A	灰		
4	甕				BG	A	灰		
5	甕				BG	A	灰		

ためにブリッジ右側で周溝の幅を狭め変形していることから第24号墳に後続して築造されたものと考えられる。周溝幅3.28～2.24m、深さ0.8mを測り、他の古墳に比べ周溝の掘り込みが深い。周溝の断面形は逆台形を呈し、立ち上がりは墳丘側が急傾斜で、外側は緩やかである。周溝底面は全体に凹凸が顕著で、部分的に深く掘り込まれたところが認められた。

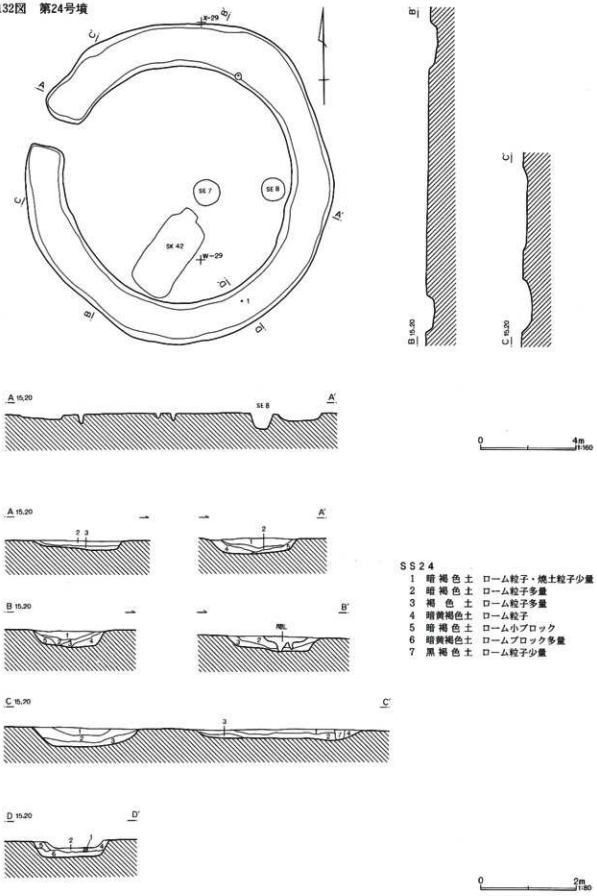
ブリッジは南西に向き、幅が狭く直線的に開口している。主軸方向はN-120°-Wを指す。

周溝覆土は10層前後に細分され、レンズ状に薄く堆積していた。中層の第5層には黒褐色の砂質土ブロックがまばらに堆積しており、自然科学分析の結果、天仁元年（1108）に降下した浅間B軽石であることが判明した。これにより少なくとも平安時代末期までは周溝は完全に埋まりきらず、周溝中程まで開口した状態であったことが分かる。また覆土の観察ではFAの混入が見られず、出土土器の特徴などもふまえるとFA降下後の築造と考えられる。

遺物はブリッジの右脇と周溝北側の2か所から土師器坏がそれぞれ単独で出土している。他には覆土中から須恵器甕破片と円筒埴輪片が少量出土している。

第131図1の坏は、ブリッジ右脇の周溝中央部から出土し、周溝底面から少し浮いていた。2の坏は周溝北側の墳丘裾から出土した。両者とも口縁部を上に向

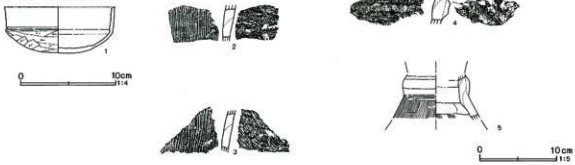
第132図　第24号墳



SS24

1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
2　暗褐色土　ローム粒子多量
3　褐　色　土　ローム粒子多量
4　暗黄褐色土　ローム粒子
5　暗褐色土　ローム小ブロック
6　暗黄褐色土　ロームブロック多量
7　黒褐色土　ローム粒子少量

第133図　第24号墳出土遺物



第24号墳出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備　考
1	坏	11.6	4.9		BEF	B	橙褐	100	

け、やや傾いた状態であった。3～5は須恵器甕の胴部片である。外面は平行叩き後、カキ目を施す。内面は目の細かい同心円文を擦で消す。胎土・焼成・色調等の特徴が共通していることから、同一個体の可能性が強い。搬入品と考えられ、墳丘部で破砕されたのであろうか。6～12の円筒埴輪は胎土・焼成・色調等の特徴がそれぞれ異なり、周囲の古墳からの流れ込みの可能性が高い。

出土した土師器坏は、体部がやや浅く、口縁部が外反する特徴から鬼高Ⅰ式でも新しく位置づけられる。また周溝覆土にFAの混入が見られないことから、築造時期についてはやや後出するものと推定される。

第24号墳（第132・133図）

調査区北側低位面のV・W－28・29グリッドに位置する。周囲には北に第23号墳、南に第25号墳、東にB区第15号墳がそれぞれ隣接する。墳丘部の規模は周溝内径10.08m、周溝外径13.6mを測る比較的小型の円墳である。墳丘部分には常滑の甕を出土した第42号土壙や第7・8号井戸、ピット多数が重複していた。

墳丘部の平面形態は、比較的形の整った正円形を呈する。墳丘盛土は既に削平され、内部主体は確認できなかった。周溝はほぼ一定の幅で巡り、第23号墳に最も接近した北側でやや幅を広げる。周溝幅2.24～1.44mを測る。周溝断面形は箱形に近く、掘り込みは全体に浅く、深さ0.4mである。ブリッジは撥形に開口し、主軸方向はN-69°-Wを示す。

周溝覆土は大きく6層に区分される。ブリッジ両脇は掘り込みが浅く、周溝覆土は3層に分けられる。覆土の観察ではFA等の火山灰の混入は認められず、FA降下後の築造と推定される。

遺物は、周溝の南東側から土師器坏が出土したほかは、全体に少なかった。第133図1の坏は、周溝南東側の墳丘寄りから単独で出土した。土層断面D－D′の観察によれば墳丘部から流れ込んだ状況を示す。口径11.6cm、器高4.9cmを測る完形の模倣坏で、口縁部の幅が短く、体部も浅くなり、型式的に新しい特徴が認められる。

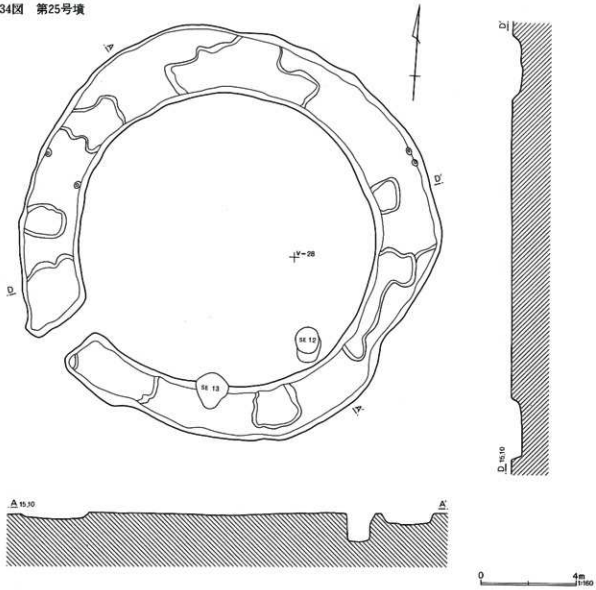
この他に2～4の円筒埴輪片と5の人物埴輪片が出土している。5は粘土紐を貼付して腰帯を表現した人物埴輪の腰部である。全体に出土量が少なく、本来埴輪は樹立されていなかったものと推定される。

第25号墳（第134～138図）

調査区北側低位面のU・V－26～28グリッドに位置し、北東に第24号墳、南に第26号墳が隣接する。南西に向くブリッジをもつ、周溝内径12.8m、外径18.08mの中規模の円墳である。規模的には第23・29号墳とほぼ同規模である。墳丘部分には第12・13号井戸をはじめ、多数のピットが重複していた。

墳丘部は比較的形の整った正円形を呈する。周溝は東側でやや不自然に幅を狭めているほかは、ほぼ一定

第134図　第25号墳



の幅で巡り、周溝幅3.04～1.44m、深さ0.48mを測る。断面形は箱形に近い。北側から西側にかけては掘り込みが浅いのに対して、ブリッジ付近は深く掘り込まれていた。底面は凹凸が顕著で数か所に不整形の土壙状の浅い掘り込みが見られた。ブリッジは南西を向き直線的に開口し、主軸方向はN-123°-Wを指す。

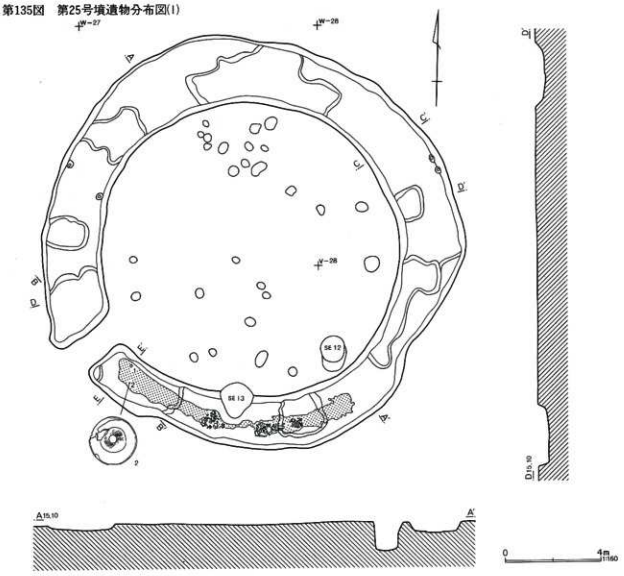
周溝覆土は大きく8層に区分される。最下層にロームブロックを多量に含む暗灰褐色土の第7・8層が堆積し、その直上をFAブロック・粒子を含む第3～6層が覆っていた。このうち第4層はFAブロックの純層である。FAの分布は掘り込みの深かい南側に顕著で、その他はやや稀薄であった。第7・8層が周溝掘削土を埋め戻して形成された築造時の周溝底面とすれば、築造直後にFAの降下があったと推定される。

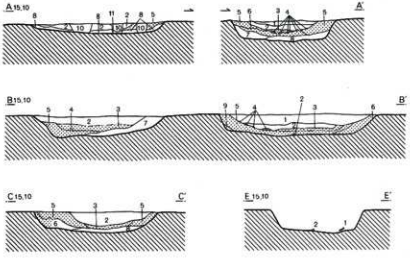
遺物は、直接古墳に伴う遺物としてブリッジ右脇の周溝底面上から土師器坏と滑石製紡錘車が出土している。また周溝南側から5条突帯の大型円筒埴輪3個体が、FA純層の上位から人為的に一括廃棄された状態で検出されており、注目される。

第137図1の坏は、墳丘裾寄りの溝底面に口縁部を上にして置かれていたものである。2の紡錘車は坏の南側に60cmほど離れた溝底面中央から検出され、FA純層に直接覆われていた。両者とも原位置を示す。

周溝南側から検出された円筒埴輪は、墳丘に樹立さ

第135図　第25号墳遺物分布図(1)



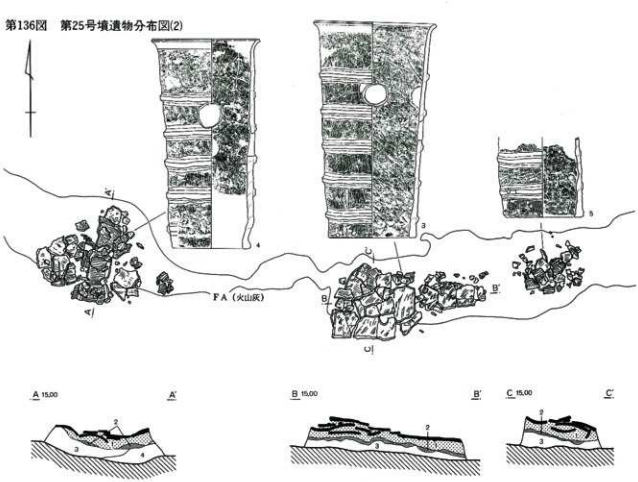


SS25 (1)

1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
2　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
3　暗褐色土　FA粒子多量
4　FAブロック
5　暗褐色土　FA粒子少量、ローム粒子多量
6　褐　色　土　FA粒子少量、ローム粒子多量
7　暗灰褐色土　ローム小ブロック多量
8　暗灰褐色土　ローム小ブロック多量
9　黒褐色土　ローム粒子少量
10　褐　色　土　ローム粒子少量
11　褐　色　土　ローム小ブロック多量

0　2m　1:80

第136図　第25号墳遺物分布図(2)

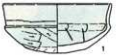
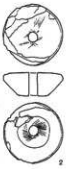
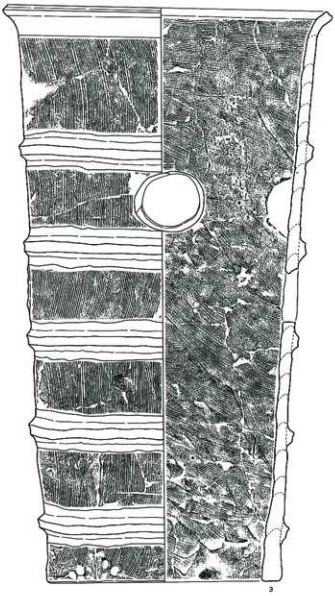


れていたものが倒壊したものではなく、明らかに築造後一定期間をおいて、周溝内に意図的に廃棄されたものである。覆土中からはこれ以外に流れ込みと考えられる少量の破片しか出土していないことから、本来埴輪は樹立されていなかったものと推定される。

その出土状況は第136図に示したように、周溝内にFA純層（第２層）が堆積した後に、一括して廃棄されたものである。東西に長さ約4.3mの範囲に大きく３か所にまとまって出土した。復元作業の結果、それぞれの群が一つの円筒埴輪に復元され、かなり意図的な廃棄状況を読み取ることができた。

西側のブロックは口縁部の大きな破片が潰れた状態で出土した。接合して見ると４の５条突帯の大型円筒埴輪に復元された。底部を一部欠損しているが、口径37.8cm、底径27.6cm、器高73.4cmを測る。最下段は大きく歪み、製作時に入った亀裂を指撫でによって補修しているため最下段の突帯が不明瞭となっている。最上段外面には横方向に１本の篦書きが、また内面には縦方向に２本の指撫でによる凹線が認められた。底部外面には黒褐色の焼きむらがある。

中央のブロックは縦に大きく割れた破片を積み重ねるように配置されていた。接合の結果、３の５条突帯の大型円筒埴輪に復元された。ほぼ完形で、口径42.2cm、底径30.4cm、器高76.2cmを測る。最下段の外面には亀裂を補修した指頭圧痕と指撫でが認められる。

東側のブロックは他に比べ破片数が少なく、細片と

第137図　第25号墳出土遺物(1)